

家庭・保育所・幼稚園

三吉公館

幼児の教育

第七十六卷 第九号 日本幼稚園協会

9



Magase

●日本保育学会創設三十周年記念出版

新刊

保育学の進歩

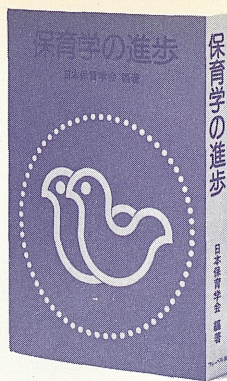
日本保育学会編著

A5判544頁／定価2700円

日本における保育学の 研究成果を集大成！

●本書には、次の先生方が執筆
されています。

山下俊郎・梅根 悟・荘司雅子・岩崎次男・
林信二郎・岩田陽子・小川正通・村山貞雄・
水野浩志・高野勝夫・渡部 晶・津守 真・
城戸幡太郎・児玉 省・千葉康則・黒田美郎・
平井信義・浦辺 史・萩原元昭・大戸美也
子・本田和子・森 重敏・穴戸健夫・金田利
子・島田俊秀・佃 範夫・舟木哲朗・海 卓
子・森上史郎・近藤薫樹・牛島義友・大場牧
夫・西本 脩・友松諦道・上野辰美・藤田復
生・高橋さやか・黒田成子・鈴木信政・日名
子太郎・乾 孝・守屋光雄・梶田毅一・岡田
正章・小川信子・松村康平 (執筆順)



好評発売中

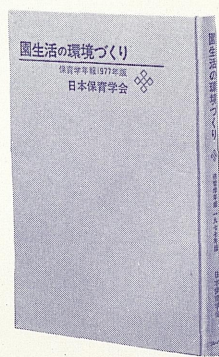
保育学年報一九七七年版

園生活の 環境づくり

日本保育学会編著

A5判228頁／定価4000円

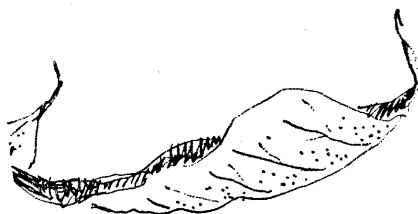
「園生活の環境づくり」のテーマに公募され
た七編の論文が掲載されている。そしてさらに
(1)園生活の環境づくりのとらえ方
(2)環境としての保育者と園庭遊具
(3)園生活の環境を生かした保育実践
の三つに再編成されている。
いずれも、園生活の環境をどう捉えたらよ
いか、という原理面にとどまらず、保育者や
遊具が環境という見地から採りあげられてお
り、さらに保育環境を生かした保育の実践が
具体的に考えられている。



幼児の教育

第七十六卷 第九号





幼児の教育 目次

——第七十六卷 九月号——

© 1977
日本幼稚園協会

表紙 永瀬義郎

(「子ども」)

カット 中島英子

幼児教育第二世紀を迎えて……………藤田 復生(4)

私の幼児教育論(その二)

——子どもをとりまく生活環境……………佐藤 文子(8)

秋ぐちの幼稚園の点と線……………東 喜代雄(14)

ひとりひとりの子どもを見つめて……………赤羽美代子(20)

⑥



若い保育者へ——K先生への手紙……………伊東 功…(22)

私の保育……………佐々木和子…(28)

米国の幼児教育における五つの実験(十二)……………大戸美也子…(32)

人でつづる保育史 飯島半十郎の生涯と思想(その一)……………小林 恵子…(40)

九月に想う……………村田 修子…(46)

写真・子どもたちの世界——猿山?——……………西本 真…(48)

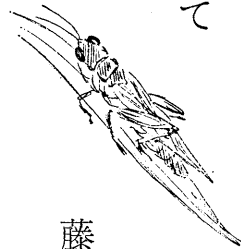
★海外文献紹介……………(50)

保育の体験と思索

——子どもたちの世界の探究——(十)……………津守 真…(54)

史料紹介 『桑名日記・柏崎日記』(その一)……………松川由紀子…(59)

幼児教育第二世紀を迎えて



藤田復生

我國の幼児教育も一世紀を経て、善きにつけ悪しきにつけて大きく変容してきたことは事実です。私など、この道に足をふみ入れてやっと三十年を越したばかりで、戦前、戦中の御苦労を乗り越えて来られた諸先輩から見れば、いわば戦後派の苦勞知らずで、勝手なことを言いながら育って来た若者と同じで、諸先輩から聞く話と、文献・資料にたよって保育の歴史を推察するばかりです。おこがましく意見などという気持ちではなく、この三十年間、私なりに感じ、思いをめぐらして来たことを、私なりに述べさせて載くことを御許し下さい。

当時私は、今日私が考えている程重大な決意で幼児教育を志したのでもなく、戦後のことで、かすかながら日本の将来を、幼い国民に期待をよせてはいたものの、明治、大正、昭和の幼児教育に身をよせられた方々の熱情とくらべて我身の浅慮がは

ずかしく、また今日のように幼児教育が陽の目のあたる恩恵さえも受けておらない時代に幼児期の教育を進めて来られた熱情や子どもに対する深い愛情に深く畏敬の念に打たれ、幼児教育の重要さを身にしみて思うばかりです。

それに反し、戦後の幼児教育の安易さ、企業的性格さえ見られる今日の幼児教育を謙虚に反省をしなければならぬと思ふのです。しかし、当時は外国からの保育理論の移入時代のためと、合わせて日陰の幼児教育実践が奉仕と愛情にたよっていたくらいがあつて、思う程には進歩性を見せなかつたのではなからうかと思ふのです。

我國の近代教育の父と言える倉橋惣三先生によって、初めて保育に科学性と創造性と基本的な幼児尊重の保育に燈火がともされました。しかし戦後の経済成長時代は、その精神を継ぐ幼児教育と、企業性を持った幼児教育の一群との混沌とした、今

日の幼児教育界をつくり出してしまったようにも考えられてなりません。

このような状態を造り出した要因には、我国の教育政策の根本的な姿勢が、明治以来、人間性や個性の尊重を考へるまえに、富国強兵時代から、欧米諸国への追跡、さらに戦後の経済国としての優位獲得方策の陰に、形式的な整備と就園普及が先行していることも見逃すわけには行きません。

戦後教育熱心な親たちの自信喪失は、ゆがめられた教育万能に火をそそぐ結果ともなつて、異常な教育熱、受験地獄と乱塾時代となり、これ程の混乱した教育狂乱の時代をつくつてしまいました。こんな悲しい精神を忘れた教育観は他国ではあまり見られません。一日も早くこのような時代を脱して、本来の人間育成の姿を取りもどさねばと思うのです。

自由社会であるからとて放置しておいて良い事ばかりではなはずで、特に教育とは、百年の先にその成果が実を結ぶであろうと、思いを致して行かねばならない程重大な問題であるように思うからです。

戦後、教育基本法、児童憲章をはじめその他の諸立法によつて、保育の拡充が行なわれて来たのですが、法とは、その性格上の融通性がとほしく、その精神を生かすことより、その規定を形式的に守ることによつて自由さが失なわれ、進歩をものはむ結果ともなつているように思うのです。

第二世紀に期待する課題

前述のように、今日の日本の幼児教育は必ずしも好ましい姿であるとはいえないとすれば、我々保育者も、社会も、その欠点を改めるにやぶさかであつてはなりません。またそれなくしては進歩は望めません。

今日幼児教育の課題として挙げられるものは、数多くあると思いますが、ここでは制度・内容・保育者像の三つの点から考へてみることにしたいと思います。

○ 教育とは、人間が生涯を通じてその人らしく幸せに暮すためのもので、しかも社会に何かの貢献をし得る人格の形成でありましょう。そして幼児期とは、それを築く土台となる時代であつて、人間として、これらのあゆるものの発達の初期です。

○ 基本的には、人間として、健康と体力が保持され、精神的に健全で、創造的な能力をそなえることが理想といえましょう。

○ 我国の幼児教育は義務制に向かつていますが、義務制になることは、簡単には賛成しかねます。発達の差の多い幼児期には無理な強制にもなり、画一化されるおそれがあります。三歳以上学齢に達するまでの子どもが、すべて望ましい教育を受けられるようになるように国が努力することは、義務教育にするこ

とはなく、幼保の一元化や、助成拡充によってできることで
す。

さらに、今の幼稚園設置基準は早急に改正してほしいもので
す。そもその発想が、小学校教育が基となっていて、幼児期
の発達からみての特性が考えられているとは思えません。もつ
と柔軟で融通性のある基準が必要と思うのです。一例を挙げる
ならば、同年齢による組の編成にも無理があり、教師一人が保
育を担当する形式も好ましくありません。組編成の幼児数と教
師数を決めるより、一施設の規模を定め、それによって、望ま
しい保育が行ない得る教師の数と設備の大きさが決まるべきも
のでしょう。五百人も千人も幼児を擁する施設で、望ましい保
育が行なわれるはずがありません。

幼小の連関についても、保育内容の六領域と小学校教科との
連関でないことは当然です。幼児期の生活と小学校生活との連
関が大切なのだらうと思います。中教審答申に「小学校低学年
と幼児とは近似する点が多く、発達が速くなったから……早期
教育による才能開発の必要がある」と言うような発想には根本
的にずれがあるように思います。

幼稚園では、小学校に入学して小学校の生活を受け入れられ
て、授業の内容を吸収できる母体を育てておくようにして、小
学校に送ることだと思ふのです。もし授業受け入れに無理があ
るなら、小学校生活がもっと幼児期の生活の特性を理解し、取
り入れるべきだと思ふのです。世界幼児教育機構では、八歳以

下と言う考え方を持っています。それが間違えられたため、幼
児期から塾、早教育、英才教育と第二の教育企業がはびこった
のです。永い一生のうち一年二年など早かろうが遅かろうが、
と考えるゆとりがなくなってきました。幼児期は徒に人間を早
熟化させてはなりません。人間性育成の基礎時代であるからで
す。

幼稚園の公立化は幼児教育を画一化してしまっています。公費だ
から安いと言う理由で政治的に利用されるくらいがあります
が、公私立の費用の格差をなくすことは、別な方法で解決され
なければなりません。義務制でない以上は、公私立の立場は同
じであるべきだと思ふのです。

○

保育内容は、望ましい人間として成長していく過程に、人間
の基礎としてつくり上げて行かねばならない体と心と活動能力
を、幼児の遊びである生活の中で培っていくための経験活動で
あって、領域に区分されるべきものではありません。総合的な
ものとして考える方が柔軟性があって、創造的で、生活と遊び
である以上、幼児の自由性と自発性を阻害することがないから
です。ですから、幼児の活動に応じて対応できる保育者と環境
が必要です。

その遊びの中で、体と真・善・美・聖の情操と、個性的な、
人間性豊かな人間としての基礎が芽生え、培われていかなけれ
ばならないと思ふのです。それには、大人たちが力を合わせて、

真実と最善をつくして、幼児教育を大切にしていくことだと思っています。

○
設置者、園長も保育者の一員です。規準に合う施設が造られ資格を持った教諭を並べたから、幼児教育ができることではありません。幼児の教育に責任を持って、すべてを管理できることが条件であるはずで、それには、十年以上の幼児教育の現場で幼児と取り組み、幼児教育に対しての熱情を持ってはじめてできることのように思うのです。小学校長兼任や副業園長で、安易に幼稚園が増え、就園率が上がったからといって、幼児教育が高まったとは言えません。

大学・短大で専門の基礎教育を受けて来た者がすべて保育者としての資格を持って居ると言うことにも疑問が持たれます。一人前の保育者になり子どもを預けられるには、三年は現場での修業を要すると思うのですが、在学中実習四週間の短期速成ですぐ一組担任すると言うことで、しかも三年ぐらいで離職したのでは、専門職でもなく、また幼児教育の実績が挙がるはずはありませんし、全く幼児は犠牲者です。

保育者対象の講習会や研究会の多いことも不思議ですが、ほんとうの保育研究は、保育への熱情と、真に使命感を持って、実績を重ねた園長・保育者であってこそ研究の意味があるうかと思えます。

三十年の間に、多くの現場職員の嘆きを聞き幼児教育の実状を見るにつけ、我国の保育は一体子どものためにあるのかという疑問が増すばかりです。このような保育を、この二世紀の今年からほんとうに考え直し、一日も早く日本のすべての幼児教育が理想を持ち、名実ともに充実されることが、第二世紀幼児教育の課題ではないでしょうか。

最後に一つの提案として、我国には総合された幼児教育研究所がありません。幼・保・学会等、それぞれがそれぞれの立場で団体活動はされていますが、公・私・幼・保一体となった幼児教育研究所が設立され、世界の文獻、日本の文獻が整えられ、我国全体の幼児教育が連係を持つ会館があるべきです。幼児教育関係者からの浄財を基金として、財界、政府はもとより、幼児教育に関心を持つ人々の協力によって国を挙げての幼児教育研究所が設立され、権力や政治の支配を受けない純粋な研究機関が、この第二世紀の早い時期に誕生することを心から祈ってやみません。

始めにお断わりしましたように、言いたいことを言わせてもらいましたが、尊敬する諸先輩、同志も多く持っております。また若いこれからの世代の保育者にも多くの期待をよせております。何卒、御寛恕下さるよう御願ひ致します。

(玉川大学・ゆかり文化幼稚園)

私の幼児教育論（その二）

——子どもをとりまく生活環境——



佐藤文子

最近は大入のような子どもと幼児のような大人が増えていると言われます。私自身、青年後期にいる人々と接触しながら、また幼稚園の子どもたちに接しながら、そのことを強く感じます。一人一人について、その成長、発達の様相をもう少し詳しく検討してみると、その発達に「ふし」がないのではないかと思われます。そしてその原因は、発達のある時期に経験しなければならぬことを省略していることにあるのではないかという思いがします。発達心理学に関する本には、人間の発達をいくつかの段階に分けて、それぞれの発達段階において果たさなければならぬ発達課題を示しているものがあります。私は、このような発達段階説から学ぶことが多いのです。

発達心理学の動向を歴史的にみると、初期には子どもの発達の姿を編年史的に記述し、年齢別に発達現象をひとまとめに区切って、発達段階を設定していくという方法が優勢を占めていました。最近では有機体の内的成熟と環境刺激の交互作用の中に発達のメカニズムを探ろうとする傾向が強く、このような立場からは、古い成熟優位の発達段階説は批判されがちです。

しかし環境の影響と個体の側の学習を重視する最近の発達心理学は、どうしてもミクロな研究法をとることになり、人の長期にわたる発達を全体として統合的にとらえることが難しくなります。

ところで、環境刺激によって人の発達は大きく影響されるとい

っても、人の生活しうる環境というものはそう無限に変えうるものではないし、乳児期に望ましい環境と二十歳の時に望ましい環境とは自ずから異なります。従って環境の影響、そして個体の側の学習が重視されるならば、それだけ、望ましい発達のために、どの時期に、どんな経験が必要かが新たに問われなければなりません。

このような課題に答えるような発達段階説が、新しい研究の立場から提示されてもいますが、新しい段階説も、研究者の興味によって、あるものは人格の発達を中心に、あるものは認知面の発達を中心に考えられており、人の全体的発達を統合的にとらえているものはなかなか見あたりません。

それぞれの研究はそれなりに教育に必要な知見を提供してくれますが、教育に従事する場合、人の一生を展望しながら、今の目の前にいる子どもは、あるいは学生は、人生のどの時期にいるのか、そして今、どういう経験を必要としているのか、今している経験はどのような意味をもつのか、ということを見極めなければなりません。こうした問題に対する目安を与えてくれるような発達段階説を生み出せないものだろうか、と私は考えております。

このような発達段階説は、私たちが今日住んでいる現実的、具体的環境とのかかわりにおいて、それぞれの段階の発達課題を示す

ものであり、人の全体的発達を統合的にとらえたものでなければなりません。

従来の発達研究をふり返ると、種としての人の成長・発達に望ましい環境はある範囲内にあり、時代や地域をこえて、ある程度共通していることが示唆されます。一方、民族学者や文化人類学者たちは、地球上に、多様な生活様式、文化型のあること、そしてそれによって民族や地域に特有の基本的性格が形成されることを教えてくれました。しかしこれまた、私たちはどのような生活様式、あるいは文化型でも自由に選択しうるものではなく、人は自分が生まれおちた文化圏の中で育てられることによって、自らの文化圏の生活様式を身につけていくことを、これらの研究者たちは示しております。

このように私たちは、種としての人にある程度共通に必要な環境をふまえながら、民族的、文化的に規定された環境の中で生活しています。そして社会・文化が次の世代に対してどのような期待をもつのか、子どもの発達のそれぞれの時期に、社会・文化がその期待を提示するところに、発達課題が生ずるのであり、子どもがそれに適切に対応することができた時、それが「ふし」となり、発達の軌跡となるのだと考えます。

ここで、最近の子どもの発達に「ふし」がないのではないかと

いう最初に投げかけた疑問にもう一度戻ると、今日の大人が、次の世代に何を期待するのか、それぞれの時期に、子どもに対して明確に示していないことが、子どもの発達に「ふし」をなくしている一つの原因ではないかと思えます。幼児教育に従事する時、何を次の世代に伝えなくてはならないのが、私たち自身に明確になっていなければなりません。しかし幼児期にあつては、あれ、これを知識として教えるのではなく、大人と子どもが共に生活する、その中で子どもは生き方として、文化を継承していくのです。従つて私たちが今生活している環境が子どもの発達にとつてどうなのか、今の社会的、文化的環境の中で、どの時期に、どのような刺激やはたらきかけが必要なのかを、見定めることが大切です。

○

これまでではかなり抽象的に述べてきましたので、もう少し具体的に現代の子どものとりまく生活環境について考えてみたいと思えます。

一般に幼児期と呼ばれている時期は家庭でのしつけの時期でもあります。子どもはこの時期に、母親、父親を通して、自分が住んでいる社会の生活のし方を身につけ、社会的規則や秩序を学ん

でいきます。また、歩行や言語がかなり自由になる時期で、子どもは自分から積極的に周囲を探索し、自分の世界を広げていきます。しかしこの時期には子どもは、直接経験により、感覚運動的に世界と接触します。

さて、このような時期にある子どもをとりまく現代の日本の環境は、どのようなものでしょうか。日本は昭和三十年初めの経済高度成長時代を境に、経済面ばかりでなく、文化面でも大きく変化しました。そして最近ではそのひずみがさまざまな面に現われ出しており、教育についても、いろいろの問題点が指摘されております。

私はここで今日の教育について総括的に論評するつもりはありませんし、また現代の生活環境の子どもの発達に及ぼす影響を体系的に論述する気もありません。ただ先に述べた、発達に「ふし」がみられないこと、大人のような子どもと子どものような大人が増えていること、などをめぐって、私たちをとりまく生活環境について、日頃考えていることを、二、三述べてみたいと思えます。

経済高度成長は家庭生活にさまざまな変化をひき起こしましたが、その一つに家事の機械化、電化があります。電気炊飯器、電気洗濯機、電気掃除機、冷蔵庫……今日どこの家庭にも電気製品が一杯です。このような子どもの身近な生活環境の変化は、子ど

もの生活経験にどんな変化をもたらしただしでしょうか。

先ず御飯をたくことについて考えてみましょう。一定量の米をといで、電気炊飯器に入れ指示された通りの水を入れて、スイッチを押す。これは幼稚園児でも年長児ならできます。そして一定の時間が経てば御飯はでき上がっています。結果はお母さんがしても五歳の子どもがしても同じです。ところが釜で自分で水加減火加減をしてたくなると、今の大学生の何人が上手にできるでしょうか。御飯をたくということは、以前はかなり技術を要すること、御飯が上手にたけるということは、成人した一人前の女性の条件の一つでもありました。でも今日では、電気釜、ガス釜を用いれば、五歳児でも、お母さんでも、おばあさんでも、同じようにたけますし、電気とかガスが停まったとなると、お母さんでもおばあさんでもお手上げです。

洗濯についても同じことが言えます。洗濯物を洗濯機に入れて、ボタンを押せば、何分か後には洗いがり、脱水までされています。これも五歳児がボタンを押しても、お母さんが押しても同じようにでき上がります。以前は、お母さんがたらいにお風呂のお湯をくんで、石けんをとかし、ごしごし洗っていました。そばで子どもが見ている、時には手を出して自分もごしごしやったりしますが、大きいものなど、なかなか扱えませんし、たらいの

水のとりかえなども子どもの手にはおえません。そばで見ている子どもは、「お母さんて力持ちなんだな」と思います。

お風呂たきも、最近ではガス風呂が多くなり、自動点火ですぐ火がつけます。これも以前は薪や石炭などが用いられていて、かなりの技術がいるものでした。子どもはお手伝いでたこうとしても、煙が出るばかりでさっぱりもえない、そこへお父さんが来て、薪と薪の間に一寸すき間をつくただけで、勢よくもえ出す。子どもはお父さんのすることを熱心に見守りながら、「お父さんてえらいんだな」と思います。

このような日常生活の変化は、幼児期の子どもの発達という点からどう考えたらよいのでしょうか。

第一には、機械化、電化されたことによって、ボタンあるいはスイッチ一つ押せば、何分か後にはでき上がっているということ、その間の過程がどうなっているのかわからないままに家事が進められることが多くなりました。機械化される以前には、家事一つ一つの過程にずっとつきそって行ったので、その直接経験から、いろいろと学ぶこともできたわけです。機械化されますと、スイッチ一つで機械を動かすことはできても、機械の構造や機能について知ることは難しく、それに関して学ぶのはずっと後になって学校でということになります。また途中の状態を見たいと思

っても、始動中の洗濯機や炊飯器に手をかけることは危険なこと
で、「あぶないからダメ」となります。

幼児期は、先にも記しましたように、直接経験により、感覚連
動的に世界を知っていく時期です。この時期に日常生活において
直接経験による事物との接触が少ないということは、単に御飯が
上手にたげる、たけないという問題をこえて、子どもの発達に重
大な影響を与えてはいないでしょうか。

第二に、以前は、家事それぞれの技術をマスターするのになら
りの年月を要しました。子どもは母親、父親のそばで、彼らのす
るのを見、模倣して、技術を習得しました。しかし機械化され
た今日では、ボタン一つ押せば自分の思う結果が出てきます。こ
れは、今日の子どもが好む変身物語に通じはしないでしょうか。
スイッチ一つで変身して悪ものを退治するということは大人にと
ってもなかなか魅力ある筋書きです。私も、冬の朝など、ふとん
の中でスイッチ一つ押して、しばらくして起きると、部屋がきれ
いに掃除され、食卓の用意ができていれば……などと思うことが
あります。ですけれど、現実にはスイッチ一つで家庭の中が全て変身
するとすれば、子どもは自分で苦勞し、努力して、何かを仕上げ
ていく必要もないでしょうし、その結果は、そういう努力のでき
ない人になってしまうのではないのでしょうか。

第三には、今まで述べてきたこととも関連して、家事の機械化
は家庭での人間関係をも変質させはしなかったでしょうか。長年
にわたって人生の先輩である父親、母親から家事の技術を学んで
いく、その過程で、技術をマスターしているものとして長上に対
する尊敬が自ずから生まれ、人間関係に秩序ができ、そのような
秩序の中で文化の伝達がスムーズになされていったのですが、五
歳児がしても、母親がしても、結果は同じということになると、
家庭における人間関係の秩序は生まれにくいのではないでしょ
うか。長上に対する礼儀を、外側から強いられてもなかなか身に
くものではないでしょう。

更にまた、長期にわたる技術習得の過程に、発達の「ふし」も
できたのでしょうか。

○

以上、現代の家庭生活に対する批判めいたことを述べてしまし
たが、私は決して、洗濯機や電気炊飯器無用を主張するものでは
ありませんし、昔の生活を礼讃する気もありません。女性の立場
からは、家事の機械化、電化によって家事は省力化され、いろい
ろと思恵を受けるところも多く、煙をもうもう立てて家をすす

一杯にして、薪で御飯や風呂をたく昔の生活に戻りたいとは、私は思いません。

ただ、幼児期の子どもの環境という点からみると、今の生活環境はこれでよいのかと考えてしまいます。私は、幼児期には、第一次集団としての家族の中で、基本的生活習慣を身につけ、自分の役割をしっかりと学びとることが大切だと思います。そのためには、安定した人間関係の中で、直接経験による段階的な学習が必要です。経験から学ぶのにはそれなりの時間を要します。昔の生活様式は子どもが少しずつ技術を習得するようになっておりましたし、その過程で子どもは、自分が行為の主体であり、生活の主人であるという感覚を得ることができたのですが、今日のように、ボタン一つ押せば全てOKという生活では、一步一步マスターしていくことによって得られる自分自身に対する確実さの感覚——自信は得にくいようです。

夏は冷房、冬は暖房と、自然の秩序に逆らって快適さを求めて

いる現代の生活において、子どもに生命の秩序をどのように回復させるか、大人の知恵が求められるところですよ。

今回は、子どもをとりまく生活環境の変化を、家事の機械化に焦点をあてて考えてみました。しかしふり返ってみると、何年か前には、職業の家庭からの分離が生じ、それに伴って今述べたのと同じような変化が家庭に起こっていたのです。今日、子どもが家庭で働く父親の姿を見ることは殆どなくなりましたし、家庭において父から子へと職業技能が受けつがれることも極めて少なくなりました。この職場と家庭の分離という都市化現象が、家庭における父親不在をもたらしたとも言われますが、家事の機械化が家庭における母親不在を招来しはしないか、洗濯機や掃除機の音を耳にしながら、ふっとそんな不安が心をよぎります。

(秋田大学)



秋ぐちの幼稚園の点と線

東 喜 代 雄

昨年度の園行事をたどりながら、秋の幼稚園の流れをふりかえってみたい。

夏休みが終って、新学期は九月二日から始まる。さっそく親子で、園庭と畑の草取り。なにしろ園庭が三四〇〇平方メートル、畑が約六〇〇平方メートルあるから、おい茂った草を抜くのは大へんである。もつとも子どもたちにとっては、労働のマネゴトのような手伝いであるが、これでも結構役に立ち、抜いた草を運んだり、ムンムンする草の上に寝っころがったり、とびはねる虫を追いかけたり、楽しそうである。

最初の集会は母の会(七日)。二学期の園行事について、そのねらいや内容をじっくり話す。その上で協力してもらおうところは協力をお願いする。

実は、毎月一回以上、母の会は開いているが、このへんの説明が、行事の成否の決め手になっているようである。やはり活

動の意義を母親たちが十分のみこんでいる場合は、子どもの活動が生きて生きているし、第一回も計画を進めやすい。案外無理を伴うような行事でも、そのほんとうの意味さえ理解してもらっていると、スムーズにいくものである——とこの頃では確信をもっている。

さて九月の一大行事は、秋の遠足、それも一風変わった「早起き遠足」。

数年前、「森」という字が書けながら「ソバ(もりそば)だよ」と講釈したある子どもの発言に刺激されて実行するようになった。それも、どうせ出かけるのなら、鳥や虫たちが一番動きまわり、静けさと冷気がいっぱい早い早朝にしようという衆議一決した。それが六年前。

おりしも「お日さまキラキラ風も青い。……谷間の小川が話しかける……」という歌を子どもたちに教えた。もつともこの歌自体が、幼児には難解な内容であったわけだが、子どもたちから返ってきたことばは、

「風ニハ色ガナイモン」

「谷間ッテナーニ？ 小川ッテ？ デモ川ニハ、ロガナイヨ」
であった。やはり、歌より、ことばより、からだごとぶつか

って体験することの必要を、いやというほど教えられたものである。

昭和五十年、福音館書店から『ゆうちゃんのみきサー車』、『かがくのとも・むすぶ』という、「森」に関係深い二冊の月刊雑誌が、九月号として発売された。この絵本は、保育の中で温められ、肉づけされ、やがて運動会のテーマとして使われるほど発展していった。

つまり、「せつかく森へ行くのなら、この本をもっていきたい」

「この絵本（森の木と木の間にロープを結んで、ブランコ、綱わたり、つり橋などを作ってあそぶ話）を、山でしようよ」

「いろんな本を森に持っていくこう」

ということになり、『ヘンゼルとグレーテル』、『赤ずきんちゃん』、『眠り姫』、『森のようふくや』、『三びきのやぎのガラガラドン』など十数冊をかかえこんで、山に出かけたわけである。

なるほどうす暗く、ひんやり冷たい森の中で森の絵本をよむ雰囲気には、保育室では得られない一種のおもむきがあった。物語を読み進みながら、「ほら、おおかみだ」と大木を指さすと子どもたちは、「キヤーン」といって肩を寄せあった。

毎年このことながらこの遠足は、朝五時二十分までに近くの駅

（西武池袋線・稲荷山公園駅）に集合、六時前の電車で出発している。ただ当日が雨模様なのか晴れるのか、夜明け前だけに天候の良否が判別しにくいこと、朝食が平常より遅くなるので、子どもの生活のリズムがくずれる心配があること——などデメリットもあるが、私たちの経験からいえば、総合的に判断して、これをいままさら中止しようとはおもわない。

遠足に、食事は二食もっていくことになる。それでも一昨年は、山の農家にお願いで、ミツバのおすまし、フキのニシメ、ホウレン草のゴマジュウニ、それにあついみそしるを出してもらった。おなががすくと、大人にも子どもにも、何もかにもがおいしいものになる。この頃は園の林で穫れた栗の実でクリごはんを炊いてもらって、みんなでいただくのが通例になった。

幼稚園では「歩く」ことを、すでにひとつの保育として重要視している。遠足、園外保育、見学……とあちこち歩くたびに一覧表に色をぬりこんで、とにかく一年間で六十キロメートルを歩こうと、この目標にむかって日々挑戦している。

うれしいことに、私たちが決めたコースはいずれも変化に富んでいて、山あり谷あり、木馬道につり橋、小川に滝、深山の趣きもあれば眺望のきく山頂もある。（富士山がみえる）——カヤぶきの農家、炭焼き小屋、ミカン畑——高いお金を払って遊

園地に出かけなくても、埼玉、東京にはまだまだ隠れた宝庫がある。

この早朝遠足にはひとつの賞品がある。この地方の店頭には、どこにも観光客をあてこんだ登山記念、バッジが何種類か用意してある。それを「ガンバリ賞」として園児のごほうびにするわけだ。遠足の翌日から、このバッジは通園帽にピカリと光る。

何はともあれ、遠足といっても、森の中で絵本を読むようになってから、あまり長距離は歩けなくなった。それでも往復で六キロメートルばかり、真っ黒に汚れて帰るわが子の自信にみちた顔を見つけて、おおかたの親たちは、あらためて幼児の生命力というか、たくましい成長力を確認されるようである。

九月の末日は、園児の「おじいさん、おばあさんを招くついで」。敬老の日の前後は、お年寄りには出歩くことが多いので、園では毎年月末に招くことにしている。孫たちと一緒に登園、あちこちを見てまわったり、先生たちと話しこんだり、やがて「あやとり」、「おてだま」、「折紙」、「おはじき」など昔ながらのあそびが展開する。このころは毎年美しい橙色の「ホオズキ」をさし入れてくださる人もある。園児のおじいさん、おばあさんであってみれば、「おとしより」とはいえない年齢好の人もあ

る。それでも、それらにわゆるお年寄りと、四―五歳の幼児には、体力的、精神的に共通した類似点が多く、そのふれあいには、幼稚園の保育として取り上げてみたい要素をいくらかもっているようにおもわれる。

蛇足ながら、私は日本の社会で、何が遅れているかといわれて、老人福祉ぐらい遅れているものはないとおもっている。「老人福祉」というと、老人ホームを建設したり、社会福祉センターや娯楽施設をつくる——ということばかりでなく、やはり老人をして、「私にはまだまだやるべき仕事がある」、「私は社会から必要とされている」というような意識をもってもらうように、まわりから働きかけていくことが必要なのではないだろうか。その接点が、幼稚園あたりにあるように私には思えるのである。

〔九月の主な行事〕

- 関東地区教員研修会（新潟）で発表のため休園にして全員参加（十、十一日）
- リボンフラワー講習会（十三日）
- くりごはんの会（十七日）
- 母の会学習会「幼児と自主性」意見発表とバズセッション

(講師・千羽喜代子先生) 県立青年の家にて (二十八日)
〔十月の主な行事〕

- 三歳児ゼミナール・八週講座 (五日から)
- 母の会ドッジボール大会 (市営グラウンド)
- 早起き遠足の8ミリ映画会 (八日)
- 講演会「アメリカの育児と教育」(講師・米人宣教師夫人)
- バトラック (一品料理の持ち寄り)と、バイキング方式の会食)

秋のメイン・イベントはやはり運動会。日頃の保育が問われる一日である。だからといってこれを、ただ見てくれのよいショー的な催しとか、単なる親子のリクレーションとか、または練習につぐ練習で、親たちをうならせることを意図した発表会であってもいけないだろう。さりとて「毎年やっているのだから——」というように、情性に流された年中行事であってもなるまい。

園によっては、子どもに大人の服を着せたり、靴をはかせたり、ピエロみたいに動かしておいて、まわりのおとなだけがゲラゲラ笑いころげているような風景もあるが、運動会は通常の保育のひとつまひとこまが、幼児の主體的、相互的な動きを通

して、生き生きと映し出されるような、そんなものでありたい。理屈はともかくとして、そんなことを考えて、実際に運動会にとりくむのは九月中旬である。

つまりそこでは、どんな遊びが展開しているか、どんな話題、どんな興味のもとで子どもたちがあそびに没入しているか——動きを共にしながらみていると、しぜんに彼らの関心事が浮きぼりにされてくる。その中から運動会のテーマとなる素材を選び出し、肉づけし、保育の中でどのような目標のもとであそびとして展開していくか洞察するわけである。これは保育者にとってまさに凄惨な戦いである。

そんな過程を追っていると、やたらに時間がかかって間に合わないといわれるかもしれない。事実要領も悪いのかもしれないが、九月、十月中にはやれない計算になる。それでも一向にさしつかえない。ひとつには、運動会というものは、保育全体の流れからすれば、開会までの試行錯誤や準備の過程こそ大切なのであって、運動会そのものは、なかば「カス」みたいなものだと思っっている。

夏休み気分も抜けず、残暑なおきびしい九月に、炎天下にさらされて練習するよりも、十月の方がよほど運動には適しているし、子どもの発想と子どもの工夫を、時間をかけて汲み上げ

ることが出来る。

先に述べたように、当園では九月下旬に「早起き登山遠足」をおこなっているが、これら二学期の行事と運動会を、どのようにかみ合わせていくかという事は、保育の要点といえるだろう。私は運動会のもつさまざまな性格や意義を考えると、行事としての運動会を早々にもつてくるのは、いかにも勿体ないように思えてならない。これこそ保育の総花、ふれあいと感動の凝集としてとらえると、子どもの成長を確かめながら、ゆっくりと高まりを待ちつつ進めることが得策だろうと思っている。

しばしば運動会の期日をたずねられて、「十一月三日です」と答えると、いちように不思議そうな顔をされるけれども、雨も少なくてカラッとした晴れ間のつづく十一月上旬は、関東地方でも肌寒いと感したことは一度もない。

子どもたちが興味をもって、自分たちで生み出した活動を完全に消化して、粘り強く表現している姿を見るのは、何としても楽しい。

私たちは数年前から、運動会にみずから条件をつけるようになった。

一、保育者は運動場になるべく出ない。但し子どもたちと感動と喜びを共有するときは別である。

一、ホイッスルを使わない。号令もかけない。

一、白線をひかない。但し子どもたちが引いた場合は別。

一、父母の直接の協力は一切受けない。(準備係、決勝係、救

護係など)

つまり、日頃の保育の延長線上に、ひとつのエポックとして運動会があればいいのであって、PTAの役員たちがバタバタと走りまわったり、保育者が金切り声を上げるようでは保育ともいえないだろうし、さまにならない。

ちなみに、近年とり上げた当園の運動会のテーマは、昨年度が「グルンバのようちえん」、前年度が「森」で「ゆうちゃんのみきサー車」、その前が「海」であった。

なお運動会には、ごほうびと称して、やたらに子どもたちにモノをプレゼントしたがる悪習があるようだが、「何かやればモノがもらえる」、「幼稚園ではモノをくれるのが当然」という発想は、そろそろ願ひ下げにしてほしいものだ。モノは「もらうもの」でなく、小さいものでも「ささげる」、「役に立てる」ことを教えるのが大事なことでないだろうか。

当園では「グルンバ……」の年は、手づくりの大きなクッキー

ー(ココナツの髪、レイズンの眼、赤いお菓子の口がついたもの)をビニール袋に入れ、キャンデーが六〜七個ついたりボン

をつけて首からさげてやった。

「森」の年は「ゆうちゃんのミキサー車」(年長さんが三週間かけて作った)から取り出されるアイスクリーム、その一個に子どもたちは歓声をあげてくれた。

年の瀬の慣例はクリスマス祝会と、終業日夜のクリスマス・キャロリング。

通園バスのない当園では、大半が園の近くの子どもたちである。地域の表通り、裏通りを、手に手にローソクならぬペンシルライトを灯して、讚美歌を歌いながら練り歩くのである。胸には白いケープ、毛糸の帽子、かじかんだ手にもつ小さなあかり——この可愛い天使たちの合唱は街の名物になった。

町ではこのデリゲーションに電灯を消したり、大きな拍手をもって園児たちを励ましてくださる。差し入れも届く。しまいには、お父さんたちが広場に用意してくれた大篝火を囲んで感謝の祈りを捧げ、また「もういくつねるとお正月」を歌いながら、お母さんたちが作ってくれたおしるこに舌つづみをうつ。

わが家を一步出ると子どもたちは「ジャリ」、「ガキ」と呼ばれ、遊び場はとりあげられ、文字通り邪魔者扱いである。

私は少年時代、日頃はしかめっつらで怒鳴ってばかりいる近

所のおやしさんが、あの「とうかんや」の晩だけはニコニコ顔でおやつをくれ、頭をなでてくれたことを、どうしても忘れることができない。

明日の世界を担うこの子どもたちに、「頼むぞ、社会は君たちが大きくなるのを楽しみに待っているんだぞ。がんばれよ!」というような素朴な願いが、どこかで子どもたちに伝えられていたらよいと思っている。

〔十一月の主な行事〕

- 入園願書受付(一日)
- 埴私幼大会で研究発表「子どものあそびと手のはたらき」(埴玉会館・十二日)

● やきいも大会(園庭で収穫したもの)

- 母の会学習会「子どもと意欲、自立」意見発表と講話(講師・立川多恵子先生)市中央公民館(三十日)

● 七宝焼講習会(二十六日)

〔十二月の主な行事〕

- お母さんのクリスマス(映画と講話・十三日)
- クッキーつくり講習会(十六日)

(埴玉・狭山ひかり幼稚園)

ひとりひとりの子どもを見つめて⑥

赤羽美代子

すべてが破れてしまったような空気の流れの中に、T先生を中心に、Dと子どもたちが立っている。

ここでは、T先生が薄紅色の品を手持って、Dに一生懸命に言い聞かせているところである。「Dちゃん、これね、鞆の中に入れておくと破裂するのよ。破裂するとね、Dちゃんの指なんか、吹きとぶの」と言っているが、Dはむっつりと頬をふくらませて、その品をT先生から取り戻そうとする。「先生がね、Dちゃんが帰るまで大事に預かっておいてあげる」D「いやだ、僕の鞆の中に入れておくんだ」と、語気を強めて足踏みをする。T先生「この間ね、子どもがかんしゃく玉をポケットに入れておいたら、ポケットの中で破裂してしまっただって。それで大怪我して、病院に入院したんだって。気をつけて下さいって新聞に出てたの」Dは、大怪我をして病院に入院させられた話に、驚いた様子で、だまって立っている。

先き程の、Dが宝物のように大事にしていた「ひみつ」の品は、紅色のころころとした、小さい玉の、かんしゃく玉が二個程と、玩具用のピストルのうず巻き状のかんしゃく玉であったらしい。この品を、Dは何の目的で持ってきたのだろうか。ともかく、Dは、大変に無念そうな顔をしている。

T先生もまた、ここは教育の場所であることを胸に抱きかかえてしまつて、この場を一步も譲らない。私は、T先生とDが真剣に向き合っているこの時を大事にして、口をはさむ事を避けた。その時、五歳児のMが「へえー、かんしゃく玉つてそんなに恐いの？　ここでちょっと破裂させて見せてよ」と、T先生に頼んでいる。T先生は早速に石を持つてくる。Dは、いつもの癖で、指をくわえてむすつと見ている。ピストル用のかんしゃく玉の紙をほどいて、上から石で小さな玉を叩くと、パン・パチッと線香花火のような細い火が、パツと出て消える。Dはちょっと後ずさりをした。そして、じりじりと私の側に寄ってくる。私は耳を押さえて「やられたー、助けて下さい」と悲鳴を上げて、Dの手をつかんだ。Dもギョッと力を入れて私に寄りかかってくる。そして「フ、」と私を見て笑うのだが、それきり、またむっつりとなる。T先生は早めに手を動か

して、パン、パチッ、パン、パチッと破裂させて、終了する。年長組の男の子たちが「すごい。先生の言う通りだ」と少々大げさに言いながら、教師に加勢をする。「ねー、恐いわね」と言うT先生の声に、Dはだまって頷いた。

Dは上履きにはき替え、他の子どもたちと、ぶらり、ぶらりと部屋に入って行く。登園時のはりきった風船玉が、しぼんだしわしわの風船のようになったDを、私はこれで良かったのだらうかと気になりながら、ある会合に出席する為に、幼稚園を出た。Dの担任であるW先生には、出がけに、かいつまんでその時のDの様子を知らせておいた。

その夜、W先生より、今日の保育の様子を電話で受けながら、Dがクラスの部屋で、「おしっこ」のお漏らしをしたとの報告を受けた。

翌日W先生より詳しい事情を聞くと、Dは朝の登園時に「今日もW先生をやっつけちゃうんだぞ」と両親に威張って言ったそうである。母親はDがかんしゃく玉を鞆の中に入れたことは、気がついていない。この二、三日、三歳児クラスの男の子は、W先生をやっつけるのを楽しみに登園してくる。

あのあとDは、いつものように遊んでいるので、W先生もホ

ッと一安心し、Dから離れた。その直後の出来事らしい。DがYに「僕、ここでおしっこしちゃおう」と言いながら、どうどうとしてしまったそうである。

その日教師会を開き、この事について語り合い、反省をした。反省として、まず、私とその場を外す時に、その場、その時の状況をしっかり捕えて、Dの担任であるW教師に依頼することが好ましく思えた。たとえW教師の判断が同じ状況になったとしても、W先生とDの気持ち、何処かで接点がい、Dもまた他の子どもたちも、かんしゃく玉の破裂音と共に、彼等の心の中の何かが気持ちよく破裂して、陰に籠ることはなかったように思えてならない。私、T、Wの三人の教師が、共にDの心の上に、教師の心に乗せて……。もっと違った解決を見ることができたように思われる。

私たちは、教育の場と、教師であることを、真正面に子どもにぶつけると、その教育からは遠く離れ、また子どもからも一番遠くに離れて、何も見えない、そして、貧しい教師になってしまふことを、しみじみと感じたのである。

(豊南坂幼稚園)

〈若い保育者へ〉

K先生への手紙

伊 東 功

お元気ですか。

先日はお手紙をありがとうございます
た。

すっかり幼児たちと生活することにも
慣れ、保護者の方々とも親しくなって、
毎日楽しくやっている姿が目にかびま
した。早いもので、幼稚園に勤めてから
もうまる二年たちましたね。

あなたの手紙に、「この頃やっど、幼児
たちがどんな時に嬉しそうな顔をし、ま
た、どんな時につまらなそうな顔をする
かが、わかるようになってきた」とあり

ましたが、私はそれをみてほんとうに嬉
しく思いました。

あなたの、子どもの顔色や表情からそ
の気持ちをくみ取ろうとしている日々
の心がけや、いつも子どもたちが嬉しそ
うな顔をして、生き生きと活動するよう
に努力しているようすが伝わってくるよ
うで、とてもすばらしいことだと思いま
した。

このことは、幼児教育にたずさわる者
にとつて最も大切なことで、しかも、最
も基本的なことだと私は思っています。

どんなに、いわゆるお上手な保育をして
も、幼児にとつてそれがおもしろいもの
でなく、翌日の朝、幼稚園へ行くことが
いやになってしまふようでは、それは、
保育者として失格です。あなたが、この
ようなことを十分にふまえて、というよ
うり、あなた自身の気分や性格が、また、
保育者としての情熱が、この二年間にそ
ういうものを自然に身につけさせていっ
たのでしょう。とても立派なことだと思
います。つまり、あなたは保育者という
専門職としての適性を十分に持った人だ

と思います。

また、あなたは手紙の中で、子どもが
いうことをきいてくれないことがある、

とか、ねらいに即した活動をさせようと
思っても、うまくいかない、とか、日案
の立て方がむずかしい、とかいってみえ
ましたが、このように二年間の実践の中
から保育についての悩みが出てくること
もまた、とてもよいことなのです。

まる二年間を経たこの時期に、いま一
度保育者とは何をする人なのかをよく考
え、勉強の糸口をつかんでいくことは非
常に大切なことです。ややもすると、保
育者として幼稚園へ勤めて、最初の一年
はいろいろのことがよくわからないまま
無我夢中で過ぎてても、その後一、二年た
つと、つまり二、三年めともなると何だ
か全部わかったような気になって、つい
保育者が一人よがりな保育をし、幼児を
叱ることが多くなったり、また、職員室

で「今年の子どもは——」などというこ
とばが出たりすることが多くなりがちで
す。

あなたの手紙にあったあなたの悩みが
このようなことを背景にしているもので
ないことを私は信じていますし、あなた
自身が、保育者として幼児に何をしてあ
げようかと、一人一人の幼児のかわいら
しい顔を目に浮かべながら、自分自身に
問いかけている悩みであることを私はよ
く知っています。

今日は、そういう美しくやさしい心の
あなたといっしょに、若い保育者として、
ここで何を考え、何を反省したらよいか
ということをお返事方々少し考えてみた
と思います。

ところで、幼稚園や学校というところ
は、いったい何をするところなのか、と
いうことについて考えてみたことがあり
ますか。

人間形成の基礎を築く場、といつてし
まえばそれまでですが、具体的に子ども
たちが何をするところなのでしょうか。

また、保育者や教師は子どもたちに何を
してあげるところなのでしょう。わた
したちは、幼稚園で実際に幼児たちと
もに毎日生活する保育者として、おりお
りにこのことをよく考えてみる必要があ
ると思います。

それは、大まかにいって、二つの面が
考えられます。

一つは、一般的にだれしもが考えるこ
と、つまり、「幼児に何かを教え、身につ
けさせてやる」ということでしょう。そ
れは、何事も小さい頃からの教育やしつ
けが大切という考えから、幼児たちに望
ましい態度・習慣を身につけさせ、ま
た、知識や技能の芽生えを培っておくこ
とが、幼児の将来のためにも必要なこと
であると考える方です。

このことは、幼稚園や学校に対する社会の要請でもあり、幼稚園や学校は、この社会的要請に應えていかなければならないというわけです。世のお母さんたちが、「先生よろしく願います」といつて、自分の子どもをいわゆる「よくできる子」に教育してほしいと願うのも、その姿の表われではないでしょうか。中には、極端な教育ママがいて、「○○幼稚園では、文字や数はもとより、英語まで教えてくれるので、この幼稚園でも文字や数を教えてほしい」とか、「うちも、○○幼稚園に通園させればよかった」などという人がある程です。また、幼稚園の先生方の中にも、会合や研究会のたびに、「幼稚園では、何をどこまで教えたらいいかをはっきりさせてほしい」と発言される先生がみえたりすることがあります。あなたの幼稚園のお父さんやお母さんはいかがですか。

ともあれ、このように極端な考え方の人はともかくとして、幼稚園や学校が正しい意味で社会的要請に應えていくということは、大切なことだと思います。

しかし、ここでよく考えてみますと、これまでの日本の教育が、明治以来、外国に追いつき追いつ越せという立場から、子どもの側からいうと内的な要求より外的な要求、つまり、社会的要請に應えるために力を入れ、「何かを身につけさせる」ということに専念しすぎたため、教育としての大切なもう一つの面をおろそかにしていたということもいえるのではないのでしょうか。

即ち、そのもう一つの面というのは、幼稚園や学校は、特に幼稚園は、人間としての幼児の内的要求に應えてやることろだということです。つまり、幼稚園は、幼児たちが、保育者とかかわりの中で人間としてのしたいことを十分に、十

分な満足感を持つことにより、「人間らしい人間」として育っていくところだと思います。

ある時は家庭や地域でしていることをつづきを、ある時は家庭や地域ではできないことを、しかも、同年齢の子どもたちがたくさんいる、いわゆる「子ども社会」の中で、また、保育者という大人とかかわりの中で、思う存分に活動させてやるところが幼稚園なのです。園という字は、そういう意味をもったところのことをいうのだと私は思うのです。

考えようによっては、このようにしたいことを十分にさせてやるということを通して、先に記した望ましい知識や技能、態度、習慣を身につけさせていくというように、このことを一つの方法論として考える人もあるうかと思いますが、それはそれでけっこうですけど、私はそうは思っていないのです。つまり、幼児に十

分な自己実現の満足感を持たせること自体が教育であると思うのです。

あなたが言ってみえるように、幼児は、興味や欲求のないことには見向きもしませんが、興味や欲求のあることには、熱中して、いっしょうけんめいに、本気で取り組みます。そして、その取り組みの中で幼児は自分の持っているものすべてを出し切って活動し、成長していきます。幼児は、自己実現の中でこそ本当の発達をしていくのだと思います。

このように、幼児に、自分を出し切って本気で取り組む活動をさせてあげることが指導であり、人間としての発達を助け見守ってあげることが教育であると私は思っています。あなたが、幼児が熱中して何かに取り組んでいる時の目の輝きは忘れることができない、幼児があんなに大きく尊く見えたとはい、と手紙に書いていましたが、それを読んで私は

ほんとうに嬉しくなりました。そういうあなたがとても美しく感じられました。あなたは立派な保育者として成長してみえるのだなあ、つくづく思いました。

このことこそ、つまり、子どもの生き生きとした目の輝きを得るように保育を展開することこそ、保育の核心ではないでしょうか。子どもが先生のいうことを聞いてくれるということも、ねらいに即した活動をもたせるということも、またよい日案を立てるということも、すべてここから出発して、ここに帰らなければならぬのだと思います。

先日、私がある幼稚園へ訪問した時、若い先生から質問を受けました。

「いろいろと話は聞くのですが、落ちこぼれなくみんなの幼児に同じ経験をさせるため、やはり一斉保育がよいと思うの

ですかがでしようか」という質問でした。

それで私は、その若い先生といっしょに、次のようなことを話し合いました。

ご質問のような立場に立つとして、実際には、朝からどのような保育が展開されていくのでしょうか。朝八時四十分頃に何らかの形で合図をし、一斉の保育に入るとして、それから約四時間、全体の活動が四、五歳の幼児に可能でしようか。まず不可能でしよう。それでかりに三十分ないし四十分ぐらいをひとくぎりとして、例えば、「さあ、みなさん△△を作ります。紙をとりに来てください。このように持って、このように切って、このようにのりをつけて……」というようにして、みんなの幼児が落ちこぼれなくできるでしようか。同年齢とはいっても発達差の大きい幼児に、保育者の「みなさん」ということばが、ほんとうに一人

一人の幼児に理解されるでしょうか。よく先生方から、「どうしても勝手なことをする幼児がいて困ります。しつけはどのようにしたらよいでしょうか」ということを聞きますが、こういうことは、ほんとうに「しつけ」ということで解決されることでしょうか。そして、そのことよりも先に考えなければならぬことは、どうしたら保育者がほんとうに一人一人の幼児に行きとどいた指導をしてあげることができなのか、ということではないでしょうか。

最近、小・中学校でさえも、これまでの画一的な一斉指導を反省して、一人一人の子どもを大切にすることか、小集団活動を活発にすることか、子どもの自由な活動を多く取り入れることかを研究テーマにおいている学校が多いことを考え合わせると、質問のように「やはり一斉保育で……」ということとは基本的に

に少し問題があるのではないのでしょうか。

幼児にとつて、「遊び」はたいへん大切なものであるということには、だれしも異論のないところです。そのため、時間と場所と環境を十分に保障してあげなければなりません。ただ、「遊びなさい」といつて放っておいてはいけません。

保育者は、常に幼児の要求を受けとめて、それにみ合った環境を設定し、幼児が本気になって真剣に遊びに取り組むようにするのです。よく、幼児の発達に即した指導が大切であるといわれますが、「幼児の要求」こそ、幼児の発達の具体的な姿なのです。ですから、指導に当たっては、例えば、幼児に与える紙の大きさや厚さにも保育者は十分な神経を使い、一人一人の幼児の気持ちや要求を受けとめて与えるようにする必要があるわけですから。

一人一人の幼児は、

(1) 保育者とふれあいたいという要求をもっています。

(2) 「本気でする活動」に必要な時間と場所を要求しています。

(3) 生活のリズムにくり返しと変化を要求しています。

(4) 保育者を媒介として、友だちと仲よく遊びたいという要求もっています。

(5) 学級全体でする活動では、緊張と解放のリズムの流れを要求しています。

このことをふまえて、保育者は、担任する幼児一人一人の具体的な要求の姿を十分つかみとり、それに応えてあげるようにしてほしいものです。

要するに、一斉に「さあ、みなさん……」といつて、例えばゲームなどのみんなでした方が楽しい活動以外の活動をするということは、表面上は「おちこぼれ」がないように見えても、実際には多

くの疑問が残るのです。むしろ、ほんとうの「おちこぼれ」は、そういう保育の中から生まれてくるような気さえするところがあります。

とまあ、およそこのようなお話し合いをしました。あなたのご意見もまた聞かせてください。たのしみになっています。

「民謡を歌う人は、また、聞く人は、その民謡の生まれた国や地方の景色が、さらには、そこに住む人の生活がみえてこなければいけない」といわれます。音楽とはそういうものですね。わたしたち保育者も同じだと思います。幼児が遊んでいる姿から、その幼児の気持ちや、保育者に対する要求がみえてこなければいけません。つまり、幼児の表面的な行為だけでなく、幼児の内面がみえてこなければいけないのだと思います。幼児の内面

が少しでもみえてきた時、そこに、はじめて保育内容が生まれ、保育者が幼児に何をしてあげたらよいかということが導き出されてくるのです。

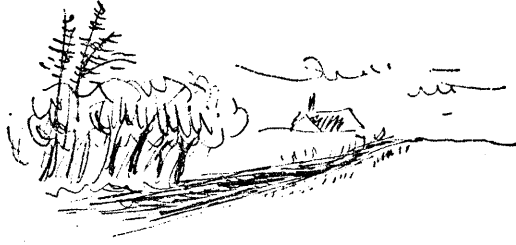
あなたもよく知っているM先生は、幼児が降園した後、保育室の掃除をする時、できるだけゆっくりと時間をかけて掃除をすることになっているのだそうです。それは、例えば、床に落ちている色紙の切れ端や、何かを切りぬいた後の紙切れを、さっさと掃いてしまわないで、それをじっと手にとって見るようにしたいためだそうです。そして、そこで遊んでいた幼児たちの顔や目の輝きが頭に浮かんできた時、それをノートに貼っておくのだともいつてみました。私は、M先生がすばらしい保育をなさるわけがわかるような気がしました。

たいへん長い手紙になってしまいました

だが、終わりに、三重県幼稚園カリキュラム委員会では、保育者の心構えとして次のことを話し合っていますのでそれを記しておきます。参考にしてください。

- (1) 幼児とともに遊ぶこと。
 - (2) 幼児の感情を受けとめ、幼児の内面の世界へ入ること。
 - (3) 幼児から学びとり、幼児とともに成長していくこと。
 - (4) 幼児の活動の意味や、発達がみえてくること。
 - (5) 常に保育に疑問を持ち、反省すること。
 - (6) 広い視野と、ユーモアを持つこと。
- またおりおりにお手紙をください。お互いに少しでもよい保育ができるように話し合っていきたいと思います。
- くれぐれもからだに気をつけて、毎日晴れやかな気分ががんばってください。
- さようなら。
- (三重県教育委員会)

私の保育



佐々木和子

一日と緑色にうめられていく田んぼを見ながら……、澄んだ青空にいきおいよくおよぎまわる園庭の鯉のぼりをみながら……、はて、みちのくの片田舎での子どもたちとの触れあいをあらためて活字に表わすとなれば、何をどう具体的に表現すれば良いだろうと、とまどいを感じる。

四季折々にかわる山河、夜ともなれば子守り歌のような波の音。恵まれた自然の中で生まれ育った本園の子どもたち、この恩恵をごくあたりまえと今は育っているが、やがて成長し町を巣立って遠くからふりかえってみたとき、ふるさとの緑の山々、小川のせせらぎ、小鳥のさえずりの美しさに、幼き時代の思い出をなつかしがり、また大切にしようという気持ちになるのではないかと期待する。

○

春と子どもたち

集団になれてほっとした頃に気づいて親しみをもつのが、観察池のメダカ、コイ、フナ、ドジョウ、オタマジャクシ……年長児ともなればそれだけではあきたらず、登園の際（本園では各地区の小学校登校班に編入して、年長に

なれば徒歩通園をしている。目についた小川のガラス貝、フナ、ドジョウを、降園時にズボンや園服のよごれなんか気にとめず泥だらけになって、はては園帽に獲物を入れて家へのみやげとする。顔、身体中泥にまみれたくましく、あさましいありさまである。こうしてすごしているうちに、園庭の二本の柿の木に白い花がつきはじめ、それがやがて子どもたちの唯一の遊び相手になる。落ちた花をひろって首飾りやかんむりを作って女王気分にはたたり、ままごとの材料にしたり、十本の指に花をさし「怪じゅうだぞー」と女兒をおいかける男児。小さな柿の花が大きな遊び相手にかわり、不思議である。この遊びは誰がはじめるともなく、年長から年少へと遊び伝えられてほほえましい。やがて水がこいしく水遊びが盛んな季節になってくる。

夏と子どもたち

「トントントントン」リズムカルな音が聞こえてくる。雑草園や園庭の土手のあちこちのヨモギを摘んできては石でつぶして、水を加えて色水遊びに熱中している。ツユ草、

スイバといろいろの雑草をためしてはジュース作りがはじめられる。小川のそばではアシの葉、ササの葉でアシ舟、ササ舟を作っては流し、作っては流して楽しむ遊びが展開される。年長ともなれば、作り方によって流れが速いかおそいかと何度もためして、工夫して友たちと競争している。夏休みがすぎ九月も半ばになると、緑の田んぼが一面に黄金色にかわる。園舎の裏の松林も少しずつ色づき、子どもたちの活動の場とかわる。

秋と子どもたち

絵本袋に松ボックリ五個ひろって数あそびをするつもりで、散歩がてら裏山に出かけると「先生キノコがあるよ」とはやくも秋の香りがただようハツタケなどが顔を出している。松ボックリひろいは、いつのまにかキノコ取りにかわる。

保育室にかえって松ボックリを並べて遊ぼうとすると、「先生ちょっと待ってて、ボクの一個足りないからすぐひろってくるね」とあわててかけ出して行き、不足の松ボックリをひろってくる。なんともほほえましい光景である。

春に白い花をつけた柿の木もすっかり色づき、収穫の時期になる。毎年自分で食べる分の二個は、自分の手で収穫することになっている。秋晴れの一日、十日後に食べられる楽しみを待ちながら、一斉に柿の収穫にあたる。手の届かない年少児には、木のぼり名人の年長男児が張切って実をとってあげたり、待ちきれずに一口ガブリと柿にかじりつき、思わず顔をしかめたりにぎやかな収穫祭である。畑のさつまいももほどよい大きさに突り、収穫を待っている。一本のつるに一名のかわいい手が伸びて収穫にあたる。この時も子どもたちは自分の掘ったさつまいもを自分で食べるのかと、内心ドキドキしながら土の中に手を入れる。小さきままな顔がのぞき歓声をあげたり、しょげたり、表情がかわいい。「太い、細い」、「短い、長い」、「重い、かるい」などさつまいもを活用しての遊びがしばらく続けられる。おやつに二度ほど食べられる。

東北の秋は短い。どうこうしているうちに日没がはやくなり、あちらこちらで冬仕度の準備が見られるころ、子どもたちの様子にもこれからやってくる冬の厳しさに対する身がまえがあらわれてくる。長い冬である。

冬と子どもたち

小学校の六年生に手をひかれ、大人すらおっくうな朝でも、防寒具に身を固め、ほっぺをまっかにして登園してくる姿には、おもわず涙が出るほどである。

秋にいろいろ活動した裏山は、冬にはゲレンデとはやがわりし、子どもたちは登園後休むまもなくそりを持って、いそいそと出かける。松の木立の間をぶつかりもせずまくぬってそりすべりを楽しむ。全員が使えるそりがなくて順番のくるのが待ちきれず、登園の際にはいてくるカッパズボン（ビニール製やゴム製のもので、防寒に役立つので徒歩通園の子どもたちは全員着用してくる）を持ち出し、そりがわりにしてすべりはじめる。そのインスタントそりがかえって長い距離をすべれるらしく、そりのうはいいはなくなる。遊んでいる途中のどがかわけば、上側の雪をよせて下の雪をほおばり水分を補給する……全く野性的といおうか、野蛮といおうか、苦笑せざるをえない。

雪国の子どもたちは猛吹雪でない限り、毎日園庭に飛び出し雪あそびを楽しむ。

教師がふみだわら（わらでつくった雪ふみ用のくつ）で雪の上に道をつけ、迷い道ごっこをしたり、それが発展し現代っ子は「基地作り」などと新しい遊びを創造する。基地にいろいろなものを作り集めることから「協力」「完成させる喜び」「くずれて残念だ、やり直そう」など体験から学ぶ。

保育室のテラスにさがった大小様々なツララに日がさし、軒下にポットン、ポットンと少しずつが落ちはじめると、そろそろ長い冬から解放され、春の気配を感じるようになる。

○

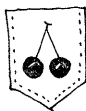
東北の人々の表情は固く、暗いとよく言われる。一年の三分の一を雪に閉ざされ、気持ちが減入り、おのずとそんな表情になるのだろうか。しかし、無邪気な子どもたちは、そこぬけに明るい。大自然を遊び相手に、のびのび行動しているからだろうか。

秋田といえども年々都市化の傾向がみえはじめ、私たち自然を愛する者を落胆させている。農業県である秋田の将来をなう子どもたちに、土を愛すること、自然を愛する

ことの大切さ、喜びを味わうことのできる大人になってもらいたいと願いつつ、保育の道を歩んでいる。本園を取りまく自然環境は、都市部の園からうらやましがられている程恵まれている。この環境を大切にし、うまく生かして利用し、活動することを特色とし、それを誇りにしている。朝四キロ、降園時四キロの道のりを、のんびりのんびり、時々脱線しながら通園する本園の子どもたち、決して知的ではないがたくましいと自慢できる。

田舎の幼稚園の子どもたちの一片をご理解いただけたら幸いである。

（秋田・西目町立西目幼稚園）



米国の幼児教育における五つの実験(十二)

大戸 美也子

一 米国におけるオープン・エデュケーションの 発生と展開 (前号より続き)

(3) 国内での定着・批判の段階

インフォーマル教育のアメリカ化

英国の幼児学校で次第に人々(特に外国人)に注目を集めて来たインフォーマルな教育実践は、さまざまな呼び名で米国に紹介されてきた。一九六〇年代前半には、「自由学習(free day)」「統合学習(the integrated day or curriculum)」「児童中心学級(child-centered classroom)」「発達の学級(developmental classroom)」と

して「レスターシャー法(Leicestershire method)」と呼ばれてきたが、一九六七年ニュートン(マサチューセッツ州)の教育発達センターで開発した「継続的成長計画」がその内容として「オープン・クラスルーム」を提唱して以来、米国でのこの種の教育は「オープン・クラスルーム」、英国のそれはそのまま「インフォーマル・エデュケーション」と分化して呼ぶようになっていった。その後「オープン・スクール(Barth & Bathrow, 1967)」を経て、米国製の固有の教育イデオロギー「オープン・エデュケーション」(Engstorn, 1970)へと変貌していく。このような呼称の変化は、単に外見上の変化ばかりでなく、その内容、教育界での位置、つき方の変化も反映しているようである。

一九六七年前は、英国あるいはレスターシャーという特別の地

域のインフォーマルな教育実践をそのまま拝借して(Borrow)米国の特定地域(ボストン市)の私立学校を中心に実践された。一九六七年、英国人と共に開発した教育センターのプログラム——「オープン・クラスルーム」が補償教育プログラムとして公教育の特定クラスに導入されて以後は、「出かけ指導」(本誌三月号参照)のシステムをとることによって、インフォーマル教育のアメリカ化が始まった。三年間の実験教育がそれなりの成果をあげたときには、このプログラムは米国製の教育「オープン・エデュケーション」に変貌していたということができよう。しかし、このような変化はわずか十年足らずの間起こったのであるから、全米的に見ればさまざまな次元のものが共存していた訳で、ここにこの教育概念の多様さと共に、実体把握のむづかしさがあるのである。また、内容的にみても、七〇年代はじめのオープン・エデュケーションはまだ自らの輪郭作りの終っていない未熟な教育実践というのが実際の姿ではなかったろうか。このような状況にも拘らず、オープン・エデュケーションは、すでに実態のあるものとして、さらには米国の公教育改革の重要な担い手として過大な期待がよせられたのであるから、普及も早かったが同時にこの教育への批判も早々と起こることを当然予測しなければならなかった。

オープン・エデュケーションへの批判

オープン・エデュケーションは、その導入時から、一部の教育者の中で最もすぐれた教育の結実として熱狂的な歓迎を受ける一方で、これが外国生まれの教育アイデアであるという点で、早くから「危険な仕事」(a precarious business)という見方をする教育者も少なくなかった(Barth, 1972; Grannis, 1973; Spodak, 1976)。また、オープン・エデュケーションが、かなりの公立学校で、採用された時期にも、これは六〇年代に現われては消えさった数々の教育プログラムと同様の運命をたどるのではないかと警戒してこれを論ずる傾向もみられた(Evans, 1975; Gatewood, 1975; Van Til, 1974)。具体的な批判の口火は、週刊誌「ニューズウィーク」(一九七五年十月二十一日号)の「基礎に戻ろう(Back to Basics)」という論文によって切られたのである。教育実験はもうたくさんだ、それより学校は「読み、書き、算術」の基礎学力をつけることに集中すべきであるという論旨である。これに対して教育関係者は、「ニューズウィークは、その読者層である中流階級の半数が、どのような教育改革にも必ず示す保守性を、単に代弁したにすぎない」と反論している。

今日、オープン・エデュケーションは、このような「基礎に戻る」運動に加え、不況とインフレさらに目新しさの喪失等の試練の中で、かつてのような熱気は失せたが、着実に、公立学校の一部に定着しつつある。すなわち、選択の可能性(alternative)として、一つの学校の中に伝統的クラスと併設されているのである。伝統的クラスとの共存によって、その内容の充実がますますせまられているオープン・エデュケーションは、それではどのような原理と方法をもっているか次にみてみよう。

二 オープン・エデュケーションの原理と方法

(1) オープン・エデュケーションの原理

オープン・エデュケーションとはどういうものか、これを定義する試みは「オープン・エデュケーション」というタイトルのついた書物を開けば必ず第一章でおこなっている。ところが、各自が思い思いの定義をするので、適切な定義を見出すのが一仕事なのである。ウォルバークとトーマス(1972)は、オープン・エデュケーションを定義するために実証的研究をおこなっている程である。二人は、オープン・エデュケーションに関する書物から百六のこれを定義する説明をとり出し、二十九人のオープン・エデ

ュケーションの専門家にこれをチェックしてもらい、五十の項目を選び出した。これによって観察評定法を作成する一方で、英国のインフォーマル・スクールと米国のオープン・クラス、さらに伝統的なクラスの教師に質問紙をおくり、その後そのクラスを先の評定法を使って観察し、質問紙との一致度の高い項目をえらび出したのである。その結果、オープン・クラスルームの教師が意識化し、実践している項目として次の六つの項目を見出した。

1、学習者の自由なふるまいへの準備(81)

——豊かな物の準備、自由な動き、事物との直接的接触の奨励など——

2、ガイダンス、学習の拡大(80)

——個々の子どもの学習に即した助言——

3、学習過程の診断(48)

——個々の子どもの観察、テスト等の実施——

4、各種診断の総合化(48)

5、人間性、尊敬、暖かさ、開放性(46)

6、教師の自己感知力(42)

(括弧内の数値は、質問紙と観察との相関)

以上、六つの項目からオープン・クラスルームがどのように運営されているか具体的なイメージをもつことができるが、必ずし

もこの教育の基本的構造を明らかにしていない。

一方、シルバーマン (1970) は、英国のインフォーマル・エデュケーションの紹介の中で、オープン・エデュケーションの核心をとらえているように思われる。

「……これこそがインフォーマル・エデュケーション(オープン・エデュケーション)だというような定型はない。わざわざ大洋を横断して持ってくるべきモデルもなければ、青写真もないのである。あるのは教育や学習に対する一つのアプローチと、子どもたちの本質についての一つのアプローチであり、これに対応した幅の広い具体的な教育方法である」(「教育の危機」第七章三〇五頁)

この簡潔な表現が、オープン・エデュケーションの性格とその基本的構造の要素を指摘しているように思われる。子どもの本質、教育や学習についてどのようにとらえているか検討してみよう。

○子どもの見方

オープン・エデュケーションにおける子どもの見方は、プロードン報告書の次の一節に集約されているといえよう。

「教育過程の中心に、子どもがいる。政策も、新しい設備も、子どもの性質と調和がとれないならば、また彼を受け入れないなら

ば、望ましい効果は期待できない。……我々は、どうしたら個々の子どもが新しい知的あるいは情緒的な発見のその最初の徴候、新しい概念をとり入れ、新しい関係に入っていく最初のレディネスを最もよく理解できるのかさえ知らないのである」(第二章九)

子ども自身が自分の教育と成長の主動因であり、それに必要なすべてのものをもっている——好奇心から調整力まで——から、大人はただ子どもが送り出すメッセージをよみとればよい、とする子どもへの全面的な信頼感ないしは楽観的な見方が強い。

○学習・教育への見方

子どもの学習の見方についても、プロードン報告書ははっきりとその立場を示している。

「遊びはすべてのナースリー・スクール、すべての幼児学校の中の心的な活動である。これには、しばしば次のような非難が伴なう。子どもたちは学校で時間を無駄に使っている、だから、「仕事」をしなければならぬ。しかし、このように仕事と遊びを区別することは、おそらく人生を通して、小学校でははつきりとあやまりである。ここには、学校ですること(仕事)と学校外ですること(遊び)を区別する過去の考え方が反映している。しかし、今や遊びは——物を使い、他の子どもと共に——そして理想をめぐら

せてあれこれ「いたずら」する意味のあそびが、子どもたちの学習の中心 (Center) であり、従って、学校の中心である。子どもたちを遊ばせる教師を非難する大人たちは、あそびが子ども時代の主な学習の手段であることに気づいていないのである……」(第十六章五二三)

ここには、子どもたちの学習についての新しい見方がある。第一に、学習の情報源が多面的にとらえられている。従来は教師というたった一つの窓口からのみ学習の情報源がもたらされると考えられてきた。しかし、ここでは、自己、人(仲間)、物(物的環境)を通して学習がすすむことが意識されている。第二に、遊びの価値を認めることで学習における直接経験、試行錯誤が評価されている。そして第三に「学校で」遊びを認めることで、学習における従来とは異なる大人の役割の重要性を認識している。

子どもを積極的な存在として認め、従って、彼自身の発揮できる時間、さまざまな人や物とふれあえる豊かな空間の重要性を指摘した教育者はこれまでも大ぜいいたが、これらを科学的に実証したのはピアジェである。英国のインフォーマル・エデュケーション、米国のオープン・エデュケーションの理論的な根拠をピアジェに求める傾向は、今日においても極めて強い。

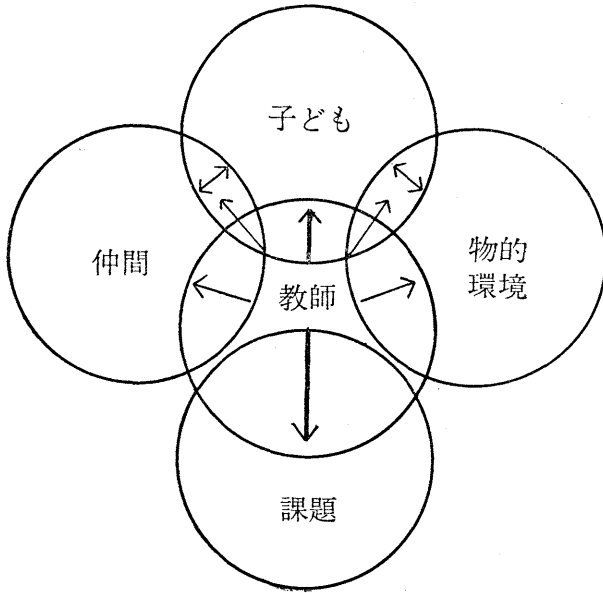
(2) オープン・エデュケーションの方法
オープン・エデュケーションを実施に移す場合、教師が配慮する場所はどこかを明らかにするため、右に述べた教育原理の構造を図解してみる(次頁図参照)。

教師の配慮する領域(↓印)として六つが示されている。これらの組み合わせ、程度によって、シルバーマンの指摘しているように「幅の広い具体的な教育方法」が展開する訳であるが、一般的には二つの要素をとり入れて教師の多面的役割を補強しているように思われる。一つは、複数の教師による指導システム(チーム・ティーチング)であり、もう一つは、子どもたちの年齢をたてわりにしての仲間による指導システムである。教師間、子どもたちの間の「差」(差領域)を生かしての指導方法であるが、それらの細かな過程分析も、またチーム・ワークの理論、交差の理論もないため、これらの要素の具体的な効果と機能については不明である。

三 オープン・エデュケーションの実際

限られたスペースの中で多様なオープン・エデュケーションの

オープン・エデュケーションの構造



実際を紹介することは不可能である。従って、ここでは、オープン・エデュケーションの実際について著した書物や記事、フィルム等の簡単なガイドをすることにとどめさせていただく。

自分の子どもの米国でのオープン・エデュケーションの生活と学習について比較的よく記述されているものに、稲垣光彦氏の『アメリカ教育通信』(理論社、一九七七)^(注4)がある。特に、教科内容、一日の展開等、教師の側に即した細かい記述があって先生方には有効な実践報告である。また、本誌次号に白井堯子の、同じく御自分の子どもの記録の紹介があるが、こちらの方はより子ども自身の成長に焦点があたっているはずである。

イギリスのインフォーマル教育については、BBC放送作製のすぐれた教育映画があるが、そのうち次の二つが、東京神田神保町岩波ビル内のイギリス・カウンスルで見ることができ、また、簡単な手続きで貸し出ししてくれるので一見をおすすめする。

「Finding Out」

「City Infant」

また、『Childhood Education』『Young Children』の二誌には、殆ど毎号これに関する実践報告があるので合わせておすすめる。
(つづく)

注1 英国におけるインフォーマル教育への動きは、米国のように急激に起こったものではない。無数の現場教師、校長そして視学官が、「自分たちの責任下にある子どもたちへの純粋な関心から、過去半世紀以上にわたって徐々に公教育へ浸透していったものである。シルバーマン (1970) は軽妙にも「これらの教師たちは、『熊のプーさん』に出てくるカンガのように、知らず知らずに良いことをした」と指摘している。

注2 一九七五年の秋、筆者がペンシルヴァニア州立大学のマスター論文の中で「オープン・エデュケーションが、米国の公教育のシステムの中で確かな位置を占めるために……」という一節を入れたところ、アドヴァイザーによって「オープン・エデュケーションは米国の学校を色どる確かな特徴 (stable feature) となってきた」と訂正された。しかし、当時華かな議論の割には、これを採用する学校や学区のことが新聞のニュースになるような状況であったし、はたして公教育に定着できるかどうか疑問視する論文も沢山みられた時期であり、筆者にはこの訂

正は納得いかなかった。そこで話し合いの結果、「比較的 (relatively)」という言葉を入れることで落ちついたといういきさつがある。一九七五年の秋頃は、オープン・エデュケーションが公教育にすっかり定着したとみることもできる時期であったようだ。

注3 “Back to Basics” の動きは今日も続いており、今年の一二月二十四日付の『タイム』誌の教育欄で、六〇年代の後半公教育批判の急先鋒であり、オープン・エデュケーションの導入者でもあったコール (Kohl) のこの動きへの反応を載せている。彼の意見は次のようである。「Back to Basics の運動は、我々にとっても良い動きとみている。不況のもとで学校は、あらゆる側面から圧迫を受けていると感じ、こうした運動で自ら防衛している。従って、これは変化への良い条件を作っているのではないか、経済的テコ入れがすめばこの運動は消える訳だから」

注4 筆者は、稲垣氏と同じ時期に、オハイオ州の右隣りのペンシルヴァニア州に滞在していた。同氏は、アメリカにおけるオープン・エデュケーションに大きな関心を持ち、この教育のもつ両義性をとらえようとしている態度に筆者も共鳴できるが、

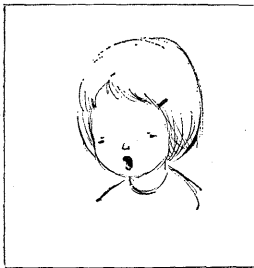
この教育実践のとらえ方あるいは現実感に大きな開きのあることを指摘しておきたい。特に、オープン・エデュケーションの印象として次のように伝えている部分についてである。

「異なったもの、みなれないものへの評価は、つくづくとむづかしいものだと思います。ものめずらしさが、日本の画一化した教育、その欠陥へのアンチ・テーゼとして興味をひくという面がありますし、日本の教室を基準とする感覚には、雑然としたクラスという印象がまずつくられてしまうという面もあります。……」（『アメリカ教育通信』一七九頁）

幼児教育者なら、少なくともすぐれた自由保育の実践を知っている者なら、オープン・クラスルームはみなれたものであり、雑然したという印象はまずもたない。筆者が、オープン・クラスルームの観察の時いつも注目したのは、先の図の教師の多面的役割がどのように果たされ、子どもたちにおいて何が実現していたか、その「保育過程」であり、教師あるいは実習生と話し合うときはこれに関する考え方（理論と技法）であった。多くの場合、そのどちらも見ることでもできず、この点に關しては日本の方がすすんでいるという印象を深めたりした。

このような私の印象は、お茶の水女子大学での幼児教育現職研究会で、現職の先生方とBBC放送の映画をみたとき、多くの

方々から「ジュニア（三年以上）は、よくやっているが、初等学校の方は私たちの方が上だ」という感想からまた一段と強められている。日本の幼児教育のある面が、世界の教育改革のフロントにあることを、幼・小で自覚し、体系化するために、オープン・エデュケーションの理解は役立つのではないかと考えている。



飯島半十郎の生涯と思想 (その二)

『幼稚園初歩』の著者——

小林 恵 子

はじめに

明治の半ばごろまでに幼児教育の分野に先駆的役割を果たした人物のなかには、その人のことが殆んどわからないまま現在に至っている人が少なくない。飯島半十郎もその一人である。

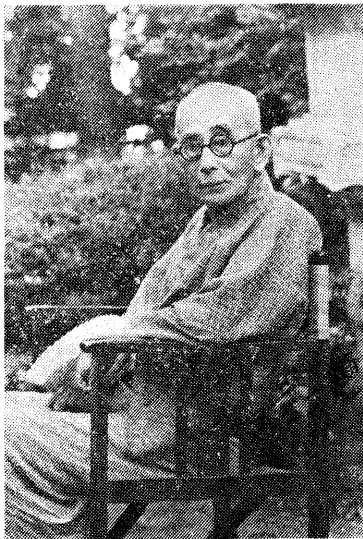
おそらく誰からも、この人のことが解明されることなく今日に及んだのであって、倉橋惣三は『日本幼稚園史』に次のように書いておられる。「飯島半十郎とは如何なる人であつたらうか。是非此の人について知りたいと思つたのであるが、一向にわからないので、残念なことと思つてゐる。種々の事蹟から考へて見ると、幼稚園のことについては、かなり造詣が深かつたらしい。当時の幼稚園に関する書の出版に当つて度々その名が出て来る。即ち『幼稚園』中巻下巻は同氏の校であり、カルキ

ン氏庶物指教及び幼稚園智恵のみちびきも、氏の校訂であり、今又、この幼稚園初歩全四冊の著者であることを思へば、直接幼児教育に当られたかどうかは不明であるが、兎に角関信三氏につぐ、当時の幼児教育の研究者では無かつたかと思はれる。⁽¹⁾

私が飯島半十郎について調査したきっかけは、この春、日本らいぶらりから出版された『明治保育文献集』で彼の著書『幼稚園初歩』、『幼稚園智恵のみちびき』の解説を依頼されたことから始まつている。最初は全く手がかりもなく人名辞典をあれこれ調べているうち、『浮世絵事典』⁽³⁾上巻に飯島虚心の名前が掲載されているのを知つたのである。さらに『書物展望』の雑誌に大曲駒村と玉林晴朗が浮世絵研究の先覚者としての虚心の生涯を記していることもみいだすことができた。調査をすすめるうちに、飯島半十郎の著わした本があちこちから発掘され、その分

野が余りに多方面に及んでいるため、私は自己の能力の限界を感じないわけにはいかなかった。しかし、このたび思いがけず半十郎の孫に当たる方にお会いできて、半十郎の書いた文書や不許他見の「言志」や漢文による「独言」などの書を手にしたとき、誰かが彼のことを書いておかなければと痛感したのである。そのいきさつを述べておきたい。

ある日、私は彼の墓があるという小石川の伝通院の地中、真珠院を訪問した。あいにく住職は不在であったが、夫人が過去帳を探して下さって、飯島家の墓は昭和五十一年二月に伊東へ移されたことが話された。飯島家の過去帳には「明治三十四、丑年八月一日 清閑院靈簪虚心居士」と亡くなった日が記されている。墓を移した飯島威次郎氏の住所（伊東市末広町）が判明し、まもなく飯島家を訪問する道が開けたことは、本当に幸運なことであった。威次郎氏は半十郎の孫に当たるわけであるが、半十郎の息子四十八^{よそは}には実子がなく養子として迎えられた方である。郵便局に勤めておられるという。孫が大学というからかなりの年配である。「父（四十八）は大変立派な人で、器用で篆刻を趣味としていた」と話されたが、半十郎の亡き後へ養子にきたので直接に知らないが、父を通して時々話をきいており、祖父は大変な酒のみで、父はそのためか飲まなかった」と



▲飯島四十八氏
半十郎の面影がしのぼれる



▲飯島半十郎の肖像画(石版摺)

言われる。日本鉄道に勤務しておられた四十八の晩年の写真は、その父、半十郎の面影を留めているようである。半十郎の写真は無く、彼の肖像画（石版摺）だけが残されていた。

半十郎の生涯

波瀾に富んだ彼の生涯を詳細に調査し考察することは、私の如き浅学な者には限界があることを最初からおことわりしておきたいと思う。彼の生涯は実に幅広く多方面で活躍しており、私の調査しえたのは半十郎のある一面を捉えたに過ぎない。

彼の生涯は、別表で示すように大きくみて三つに区分されようかと考えられる。一期は幕末から維新にかけて世の中が最も変動した時期であり、半十郎の青年期に当たる。二期は多方面に活躍し文筆活動を行なった壮年期で、幼児教育に関する文献や教科書など数多くの教育関係の書がこの時期に編纂されている。三期は浮世絵の研究に専念する孤独な晩年である。

半十郎は天保十二年十月十七日に生まれ、明治三十四年八月一日六十一歳で没した(1841~1901)。飯島虚心、曙里、局外閑人とも号した。

(一) 生いたち

江戸生まれというが、その場所はあきらかでない。彼の幼年時代の記録は何も残っておらず、ただ玉林晴朗が『浮世絵研究の先覚者飯島虚心』の書に彼の著書『天言筆記』について、「此の書は藤岡屋由蔵の日記百八十有余卷の中から虚心が必要のものを抜萃して五卷となしたものの、由蔵は神田旅籠町で書肆を営み日々店頭に座し其の聴書を記してゐたもので虚心は下谷摩利支天横丁に住み家も程近いので常々幼時からそれを見て知ってゐた」⁽⁷⁾とあり、下谷摩利支天は上野の松坂屋の北側あたりであるから、この方面で育つたものと思われる。

半十郎の生家は幕臣で父善蔵は和宮様天璋院様御広敷番之頭をつとめたほどの人で、世禄高百俵五人扶持⁽⁸⁾を得て居り、経済的にも豊かな家庭に育つたことが理解される。また母の父は鈴木安房守で勤士並寄合で和宮御降嫁の際に御供を申し上げた人である。半十郎には弟が二人、姉妹が三人あり彼は長男であった。彼の学問は昌平黌と講武所で学んでおり、昌平聖学科挙の人名帳に文久二年正月乙科の二十番目に「佐渡奉行支配組頭善蔵内 飯島半十郎」とある。乙科というのは成績を示したよう⁽⁹⁾で甲に続く良い成績をとったこと、またこの頃に父善蔵が佐渡奉行支配組頭であったことがあきらかである。

年		代	半十郎の生涯と著作 (★著書 ●校)
I 期	1841	天保12年	江戸に生まれる。(長男) 父：善藏(幕臣, 静岡県土族) 母：ゆき(鈴木安房守の娘, 幕臣) 弟：2人 姉妹：3人
	1861 (20歳)	文久2年	昌平黌卒業。講武所に学ぶ。 函館奉行江戸役所書物御用を勤める。
	1866	慶恵2年	成島柳北の配下, 太田の陣屋にあって騎兵指図役となる。
	1868	明治元年	回天丸に乗り仙台へ脱出。 父, 弟と函館へ。小金ヶ原の開墾に従事。
II 期	1873 (32歳)	6	「東京新報」の編輯(明6.2~6.6)
	1875	8	「洋々社談」の会員, 編輯(明8~16年) 文部省 報告課 雇入。
	1876	9	★「日本地理全誌」巻1~5(二書堂) ★「碎玉」上・下 ●「幼稚園」ロンゲ著, 桑田親五訳の巻中・下の校(文部省)
	1877	10	●「加爾均氏庶物指数」カルキン著, 黒澤壽任訳の校(文部省) ★「清響」(修身及教訓)(尚友堂)
	1878	11	★「日本地誌」畿内の部(虚心堂) ★「輿地誌略字引」(内田正義刊) ★「日本暗射地図」(文部省)
	1879	12	山林局御雇申付 ★「木曾沿革史」(未刊)
	1880	13	●「文部省百科全書」記述考 チェンバース編 蒸気篇, 陸運の校
	1881	14	★「初学山林書」上, 下(福田仙蔵刊)
	1882	15	●「文部省百科全書」記述考 チェンバース編 温室通風点光の校 ★「初学家事経済書」上, 下(虚心堂, 尚友堂)
	1884	17	★「初学地理書」巻1~4(三書堂)
	1885	18	★「幼稚園初歩」巻1~4(青海堂) ★「幼稚智恵のみちひき」上, 下(修静館)
		19	★「小学日本地理教授書」上, 下(青海堂)
		23	★「家事経済書」博文館叢書 結婚 妻：不詳 長男：四十八(明8.4.15生) 長女：なつ(養女にだす) 次女：まつ
	III 期	1893 (52歳)	26
		27	★「浮世絵師便覧」蓬樞閣
			★「浮世絵年表」
			★「歌川列伝」三冊(明27)
			★「歌川雑記」
			★「河鍋曉齋翁傳」五冊
			★「日本絵類考」(明27.1)
			★「蒔絵工程」 ★「図絵寶鑑」
			★「蒔絵通覧」
			★「蒔絵師傳」三冊(明25~26)
		★「言志」(明28.6)	
		★「落首集」二十冊	
	1901	34	病没(61歳)
	1912	45	★「天言筆記五巻」新燕石十種第一(紙魚堂)
	1941	昭和16	★「浮世絵歌川列傳」(敵傍書房)

注 —— 線は幼児教育に関する文献

(二) 指導者、中村敬宇

青年期に半十郎が最も大きな影響を受けたであろうと考えられる人物に中村敬宇（正直）があげられる。彼が勉強した昌平費は江戸時代の最高学府であり、徳川幕府の直轄学校であった。入学は幕臣が原則とされ、学科の中心は朱子学であった。教官は御儒者と同見習（教授、助教にあたる）があり中村敬宇は文久元年二月御儒者見習となり、翌二年、三十一歳で御儒者となり、昌平費内の官舎に移り住み、林氏を輔佐し運営に当たっている。⁽⁹⁾ 漢学はもとより広く蘭学、英学に通じ、広い視野と高い品性をもつ若い敬宇が、昌平費で学ぶ塾生たちに大きな感化を与えずにはおかなかったと考えてよいであろう。敬宇は天保三年（一八三二）生まれで半十郎より九歳年上であった。共に江戸生まれ、静岡県士族であったことから深い師弟関係が昌平費時代から始まったものと考えられる。半十郎の号「虚心」は敬宇が彼のために聖書から選び与えたもので、中国訳の聖書で「虚心者福矣以天国乃其国也」（マタイ伝第五章三節⁽¹⁰⁾）からとったものである。敬宇は東京女子師範学校の摂理となり幼稚園開設の建議を行ない、わが国幼稚園の創設に大きな貢献をした人である。女子教育、幼児教育、訓盲院の設立など幅広い社会的活動を行ない、明治初期の思想界にあっても福沢諭吉と並び

称せられる人物であった。幕府から英国留学生取締として渡航、『自由之理』『西国立志編』を刊行、洋学塾「同人社」を開き、「明六社」結成に参加するなど、当時の青年層に多大な教育的感化を与えている。こうした敬宇の生き方や考え方は、半十郎の生涯に大きな影響を与えている。『幼稚園初歩』『日本地理全誌』の序は敬宇が書いており、「東京新報」という雑誌は敬宇の支援によって編輯したものである。

(三) 成島柳北の影響

中村正直とは違った面から、半十郎の生涯に大きな影響を与えたもう一人の人物は、成島柳北ではなかったかと考えられる。柳北は天保八年江戸、浅草生まれ、彼より四歳年上で、幕臣の家に生まれ、昌平費に学び奥儒者となり將軍侍講をつとめた。慶応二年、横浜太田陣屋に赴任し騎兵頭となったが、このとき半十郎は彼の配下にあった。柳北は早くから世界の大勢に眼を開き、明治五年に東本願寺法王現如上人に随行、ヨーロッパに旅をしている。このときの一行五人に東京女子師範学校付属幼稚園の摂理となった関信三が一緒であったことは興味深い。⁽¹¹⁾ 仏、伊、英、米を訪問し知見を広めて帰国した彼は、維新後、新聞記者となり、随筆家・詩人としてジャーナリストの世界に

活躍した。半十郎と彼の出会いはいは昌平齋であり、太田陣屋で彼の部下であったことから青年期に影響を与えたものと考えられる。晩年、半十郎が世事からはなれ浮世絵の研究にとりくむのであるが、これはどこからきているのであろうか。そこには若い日の柳北の影響を考えざるを得ないのである。前田愛は『成島柳北』の書で、柳北の生き方は「豊饒で美的に洗練された江戸の文華をぞんぶんに享楽しつくした青年時代の体験ときりはなすことができない」柳北は遊びにおける精神の自由に触れていたのだ⁽¹⁾と記している。こうした自由な遊人、柳北の生き方は半十郎の青年時代に少なからず影響を与えたに違いない。中村正直とは性格を異にする儒者、文人としての柳北は、彼の生涯にあっては別の角度から彼に影響を与えたのであって、そこには洗練された美への目覚めが日本の浮世絵と結びついていったのではあるまいか。半十郎の妻が戸籍で不詳となっていることや、娘おなつを浅草の任人に養女にだしていることなど、不明な点が多いことからみても、半十郎は柳北と同様、江戸の下町情緒や文化をぞんぶんに享楽しつくした青年時代を体験した人であって、それが浮世絵の研究に結びついていったものと考えざるを得ない。そして彼の著わした『幼稚園初歩』のなかに江戸庶民の生活の知恵や遊びが生き生きと描きだされているの

である。たとえば一本の紐や手ぬぐいから無限の変化がつくりだされていくところに、江戸文化のひとつのあらわれをみるこ
とができるのであるが、彼は子ども遊びの中にこれを見ていたのである。(つづく)
(国立音楽大学)

註(1)倉橋惣三 新庄よしこ共著「日本幼稚園史」昭・31 フレ

ーベル館 378頁

(2)岡田正章監修「明治保育文獻集」別冊

(3)吉田暎二編「浮世絵事典」

昭・46 画文堂 上巻 39頁

(4)大曲駒村著「飯島虚心翁」『書物展望』昭・9

(5)玉林晴朗著「浮世絵研究の先覚者飯島虚心」『書物展望』

昭・13 7月号

(6)真珠院の任職、石井俊瑞夫人

(7)玉林晴朗著 前掲書 28頁

(8)飯島威次郎氏宅に残されている文書による。

(9)高橋昌郎著「中村敬字」昭・41 吉川弘文館 9～10頁

(10)慶応二年(同治五年)香港英華書院発行の「新約全書」

(11)津守真記「関信三略年表」参照

(12)前田愛著「成島柳北」昭・51 朝日新聞社 7頁、18頁



九月に想う

村 田 修 子

いろいろ、さまざまな人たちと話し合ってみますと、自分が子どもだった頃のことを全然覚えていないタイプと、全部が全部というわけではないにしても、印象深かった事柄については、ことこまかく覚えていてるタイプがあることを感じます。

いま私の目の前で、思い思いに活動している子どもたちは、こうやって夢中になってしたこと、楽しさをいっても覚えているほしいし、「この時代には楽しく遊ばせよう」と協力してくれる親と共に生活していることを忘れないでほしいと願わずにはいられないのです。

それは、大人になってから昔のことを思い出しながら語る人の顔には夢があり、童心が感じられるからなのです。「自分はおあいうこともした。またこういうことをしたのはとてもうれしかった。悲しかった。恐ろしかった。」

た。……」ということがあとになっても思い出せるのは、からだで感じ、心で感じたこと、つまり実際に体験したことではないかと思えます。

幼稚園生活を経験しなかった私は、九月に思い出すこととしては、小学校の低学年のときのこと、夏休みの終わったのが残念で残念でたまらなく、学校に行くのがとてもいやだった、ということでした。

海辺の町でしたから毎日海へ行くのですが、おもちゃのような電車で三十分ほどのって、雨が降ったらおしるこのようになりそうな、ぼこぼこの土ぼこりをあげながら、じりじりと太陽に照らされて小高いつち山のうねりを三つ越えるのです。

その度にうんざりとしながらも、海への魅力にひかれ

て、毎日ほこりまみれの松林の中をあえぎながら歩いたのですが、その道のかたわらにある池に、大きな萱草が生え、その中をとび交うおはぐるとんぼの群れに子ども心にも神秘さを感じ、それを見ることに期待を持ったことや、三つ目の小山を登り切ったとき、前方にきらきらときらめく海の水の輝きを見たときの興奮、また水遊びをしたあとでたべた甘いみたらしだんごやゆであずきの味は、今だに昨日のここのように思い出せるのです。

これは私にとって懐かしくうれしいことであると同時に、現在子どもに接していく上でとても役に立っているのです。例えば、昨日の日曜日お父さんと釣にいかかにつかまえた話をしてくれる子どもがいると、岩の間へこわごわ手を入れる感じや、穴にそって砂を掘り下げていく、ざくざくとした砂の感じなどがよみがえってくるので、自然と子どもとの話に熱が入り、盛り上がりができるのです。

その子どもはかにとりをした経験に、話し合いをした経験を加えて、「かにとり」として覚えていくられるかもしれないのです。

ですから、私のまわりにいる子どもたちがどういうすごし方をしたならば、またどういう経験をしたらならば、この時期のことを覚えていられるのかしら、と思うのです。

といって子どもたちに目先のかわった刺激ばかり与えることは好ましくありませんので、私なりにありふれた普段の生活、活動を落着いた状態ですることによって、それに安定感を覚えて、案外こうした習慣化したことが印象づけられるものではないかしら、と思っていま

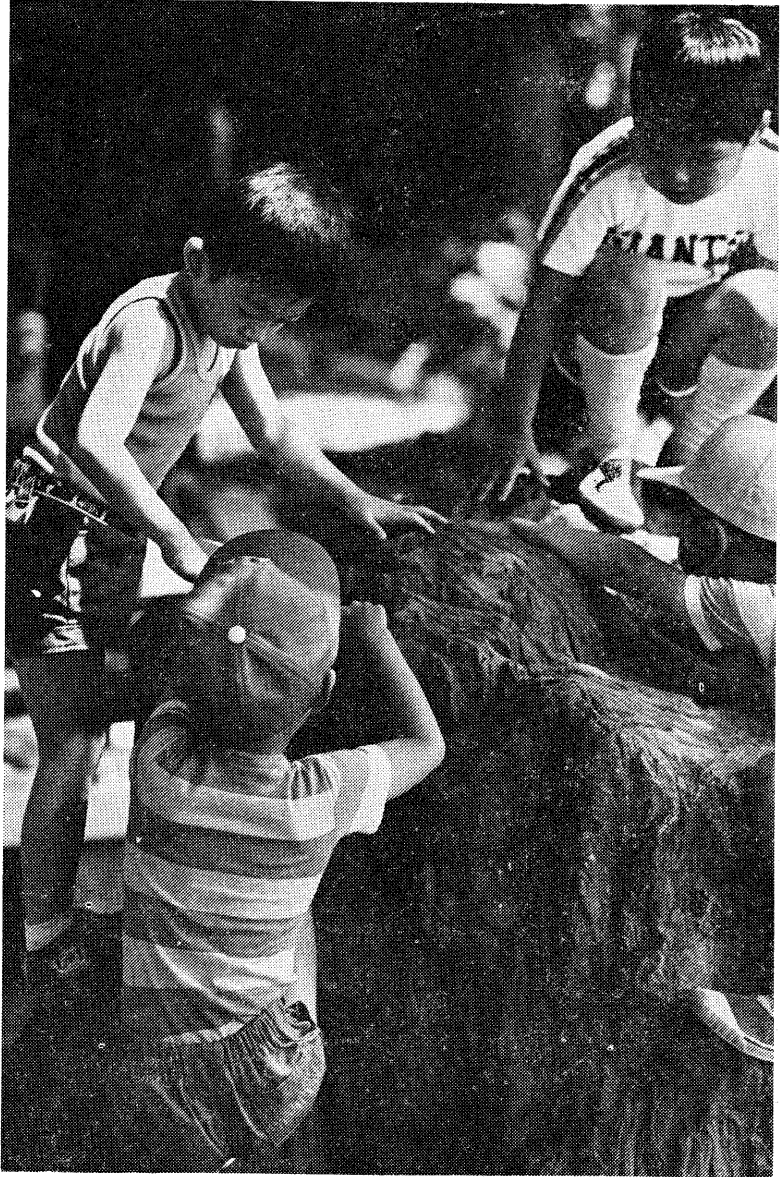
す。それにしても昔のように自由に活動できる場が少なくなってしまったり、日常生活環境がちがってきてしまった現在では、九月になって園が始まり、そこで友だちと遊んだり、思う存分活動することを待ち望んでいるひとが多いのではないのでしょうか。

夏休みが終ることがいやでいやでたまらなかつた私とは大変なちがいで、子どもが利口になったというのか、分別ができてしまった感じですが、私はここいらに問題があるように思われてなりません。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



猿 山 ？



写真撮影 西本 真

★ 海外文献紹介 ★

“Learning More About Children and Families”

by Patricia Edminister

Childhood Education

January 1977

『Childhood Education』の一九七七年一月号は、「家族と子どもたちについてもっと知ろう」という特集の下に、成人（両親）教育の二つの実践報告、建国二百年祭の行事として、首都ワシントンのスミソニアン博物館でおこなわれた「昔の家族」写真展の紹介、そして青年の嗜好と十代の母親の影響をみた論文が集められている。特に、特集と同じ題名のパトリシア・アドミニスターの論文は、最近の米国における家庭の変化の実態と「良き親」作りの成人教育の実践例が報告され興味深いので、今回はこの論文を中心に紹介してみようと思う。また、エシー・リーの「嗜好、栄養、

そして十代の母」で紹介されている十代の母親 (child mothers) の増大も、最近の米国における家庭の実態の事例なので、それもアドミニスターの論文の中でふれていくことにする。

P・アドミニスターは、メリーランド州モンゴメリー郡の公立学校の成人教育科の両親教育の担当者で、この論文は、現在のアメリカの家庭と子どもをめぐる危機的状況の認識を背景として書かれている。それらは、急激な社会的価値観の変動にともないつつ表層にあらわれてきたものであるが、離婚数のかつてない増加（アメリカでは一九六七年でさえ、人口千人に対する婚姻率が十一・四、離婚率が四・〇、すなわち約三分の一が離婚する。ちなみに一九六六年の平均初婚年齢は夫二三・九歳、妻二一・四歳）私生児の増加、母親の家庭外就労の増加、さらに核家族化現象の急速な進行およびそれにともなう地域定着性の減少等が指摘されている。これらが全て家庭の形成、維持発展——とりもなおさずそれはそこにいる子どもの発達そのもの——にマイナスに働くものとし、アメリカ社会は減んでしまおうという予測や、かつての大家族制にかえるべきであるという主張をする人々が一部にいます。一方、このような状況の中でこそ現在の孤立無援の親たちを援助する様々の方法を探究すべきであるという主張が広がってき

つつある。

特にアメリカにおいては、核家族化現象の進行およびそれに伴う子育て術の伝達の障害という一般の問題にとどまらず、より切実な問題が下層に横たわっている。同月号所収の論文“Food Fads Nutrition and Teenage Mothers”によれば、一九七五年のデンバーにおける学生結婚 (School-Age Parenthood) に関する全国会議で次のようなことが報告されたとのことである。①今日のアメリカの母親の約二〇%は、ティーンエイジャーである。②十六人に一人が十七歳で母親になっている。③一九七四年に十七歳以下で子どもを生んだ女子は二十五万人。④一九七三年の全黒人の出生の四五%は私生児であり、そのまた半数(十二万人)の母親は十五〜十八歳であった。彼女らの大多数は極貧階層に属している。これらのショックな実態を深部にかかえつつ「親役割のニード——Parental need——親であることの認識、親が親としてふるまいうるための基本的知識および子どもとのつき合い方の技法等に対するニード」が全般的に増大してきている。それに呼応して様々な成人教育が全米で始まりつつある。本論文の紹介する両親教育としての「ライフサイクルアプローチ」もそのひとつである。このプログラムは名称が示す通り、親のライフサイクル全般にわたるものであり、子ども及び親の発達段階に応じて生ずる様

々な問題について、広範囲にとりあげていることがひとつの特徴である。次に本論文に紹介されている三つのプログラムについて見ていきたい。

「乳児の発達と親」プログラム

「どこもたよれるところがないんです。うちの赤ん坊が泣いて泣いて……。抱いてやったりゆすつてやったり、昼も夜もおもりをしているのに疲れてしまったんです。私たちは最近ここへ越してきたばかりで、主人は新しい仕事でほとんど家をあけているし、私には知り合いは一人もいないし……。お医者様はどれも悪いところはなと言っていますが、私の方がもうくたびれてしまいました。いったいどうしたらいいんでしょう。」

このような乳児をかかえて悪戦苦闘(?)している親にこのプログラムがすすめられる。このプログラムでは、ベビーシッター共同組合の活用のような具体的な便宜と同時に、同じような問題をかかえ、共通の興味と関心をもった親子との交流が図られ、討論の場が与えられ、小児科医、心理学者、栄養の専門家等からの乳児の発達に関する基本的な知識を与えることによって、「親としての技法——parenting skill——」の向上を目ざしている。また、様々な発達段階の乳児に会うことで、彼らに自分の子ども今後の予測を与えること、さらに「年長の」赤ん坊の親たちに「年少

の「赤ん坊の親への、乳児の発達過程に関する知識の伝達者になつてもらうことを目ざしている。

「幼児の発達と親」のプログラム

「うちの二歳の子は、居間のじゅうたんの上に洗剤と水をいっぱい流して『お手伝いしてきれいにするの』と得意がっています。どこに行けば、この子の遊び相手がみつかるでしょうか。それにナースリースクールの選び方、排泄訓練のしかた、言葉の発達などについて話し合える場がほしいんですが。」

二、三歳の子どもとその親を対象にしてこのプログラムは組まれている。ここではまず第一回目のセッション(約二時間)で、親、教師、子どもの三者が、一緒に遊ぶところから始める。この活動を通じて遊びを楽しみ、それによって幼児の認知及び運動の発達が促されるように考案されている。次に、大人たちは隣室に移り、「親であること」に関する様々な問題について論議を交わし、その間、子どもたちは、教師と(当番の?)親に見守られて、遊びを続けるようになっていく。

これらの二つのコースでは、乳児への刺激的活動と、初期の自己同一性の獲得に関する知識と、親自身が自分の子どもの教師となり観察者となれるような手だてを統合した完全なカリキュラムが作られ、訓練がなされている。これらのクラスの指導者は、大

学及び教育現場での経験をもち、更にこのカリキュラムをこなすための訓練を受けた人であり、親たちは子どもの発達の進行状況の記録者となり、有能な観察者となっていくことを援助される。

そのために特別な器材を使ったり、「ビネット」と呼ばれる子どもの行動記録をとることが用いられる。「ビネット」は「肖像画」というような意味であるが、「子ども自身が自由に環境や他の人々に関わり合っている状況」の像を得ることによって、子どもの発達の状態を知り、環境の一部でもある親や教師の役割を明らかにしていく機能をもっている(同月号所収の論文 *Vignets of child Activity* を参照のこと)。子どもの記録者となり観察者となることを通じて、親の関わり方を学んでいくことができる。また、このクラスにはハンディキャップをもった親も迎え入れられる。親たちに勇気を与え、子どもたちに他の子どもと一緒に過ごす機会が与えられる。

特別プログラム

親のスキルの向上が乳幼児の発達にとっても重要であるという認識から出発したこのプログラムも、様々な親たちのニードに合わせて大きく広がってきつつある。「別居と離婚」「片親」「多動性の子の親」というようなプログラムも作られており(これは非常に成功した部門である)、一般からの要望によって「養子子の親」

というコースも新設された。また思春期の子どもをもつ家庭の問題、異世代間の相互理解の問題——いわゆる「世代の断絶」と言われた十代の子どもの親の問題だけでなく、もうすでに大人になった子どもと老齢になりつつある親の問題を含めている——等にも取り組み始めている。「親となること、親であること」と同様「年をとること、老人であること」も親のライフサイクルの重要な部分であり、このことに関するセミナーや公開討論会も開催されている。また毎年夏には専門家と協力して「成長する親——成長する子ども両親教育会議」といった日を設け、一般に公開している。この毎年の行事は様々な問題をかかえた親たちにとって非常にすばらしい情報交換と交流の場になっている。さらに多くの親や教師の要望に答えて「両親教育資料センター」も開設された。そこではこれらの問題に関する様々の書物、レコード、フィルム、器材等を用意し一般に公開しており「おもちゃ貸出し図書館」も併設されている。

以上が本論文で紹介されている成人教育プログラムの内容であるが、ここでとりあげられている諸問題は単にアメリカ的特殊事情によってのみ存在するのではなく、現在の日本においても大いに考えられるべきことからである。子捨て、子殺しとはいかない

までも、若い親が育児ノイローゼになる条件は整いすぎているとあっていいほどである。現に親となっている人もこれから親になる人も、子育て学や親学(?)を学ぶチャンスを全く与えられない。わずかに学校教育の「家庭科」の中でほんの申し訳程度にふれられるだけであり、しかもそれは女子のみに限られている。人生のどの時期にどんな方法で子育て学、親学を学ぶのがよいかということを含めて検討される必要があるように思う。

また本論文では、親であることの問い直しを、スキル(技法)を与えること、それを手がかりとして親自身が討論学習を積み重ねていくことにより親の成長を促しているが、この視点は今後考慮されるべきポイントになるように思う。というのは、日本では子育てをめぐる論議が、細かい育児技術に倭少化されてしまう傾向と、全く反対に「親のあり方」論的な道德的倫理的な問題に解消されてしまう傾向が強いように感じられるからである。どちらにも言えることは、その中で当の親自身が学び育つよりどころを提供されていないということである。「成長する子ども——成長する親」というテーマに十分に考えられるべきことである。親としてどう育っていくかは単に自分の子どもに対する責任の問題ではなく、その個人の成長の課題であり、同時に社会人として成長していく課題でもあるはずだと思う。(山口大学・友定啓子)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究—— (十)



津 守 真

流れゆく暗い奥をのぞく

六月二日

Tは活発で積極的な、明朗に見える子どもである。この日、久しぶりにTは私の手をひいて水道の流しにきたので、私もゆつくりとつき合うことができた。Tは知恵遅れがあるが、最近はずきりとした口調でおとなと話す。

Tはプラスチックの桶に水道の水をいれ、ポスターカラーをいれる。水があふれそうになり、泡がたち、きれいな色水になると、水道をとめ、水をいちどぎにざっと流す。その流しのわきに、雑

巾流しがついており、床面まで深くなっている。Tはその中に首をいれて、水の捌け口の渦巻状の金具をとって、奥の方をのぞきこみ、耳をそこにつける。こういうことを何回もくりかえすので、私もTと同じように、深い流しに首をつっこんで、耳をつけてみた。奥の方で音がきこえる。

よく注意して見ていると、桶の中の水が青色に染まり、あるいは赤色に染まり、水圧で湧き立って泡が出るのはとても美しい。Tは、ホワイト、レッドなど、英語で色の名をいう。私がわきで見ているよりも、本人にとっては、もっと美しい色の水なのではないかと思う。その水をざっと流すと、流しの捌け口の金具は、少し浮き上がり、水は渦を巻いて下の方に流れてゆく。それは四十分くらいつづいた。私はTのこの作業につきあっているうち

に、これはTにとってまじめな作業であると思うようになった。

単純な手順ではあるが、自分で作った美しいものを、自分の手でひっくりかえして流し去り、渦を巻いて捌け口から下の方に流れてゆくのを見、さらに、その音が消えてゆくのを耳をつけて聞く。その流しの捌け口の金具をはずして、目をつけて奥の方を見るとき、その下の方が黒く暗くつづいていることに、私ははじめて気がついた。私はTとつきあいながら、この二年あまりの間に、私がTとふれたいくつかの印象がさっと心をよぎり、暗く口を開けた彼方の世界を見とどけ、克服しようとするかのようなこの子ども遊びを、私自身も似たような課題を負っているように思えて、一緒にゆっくりとつき合うことができているように思えて。

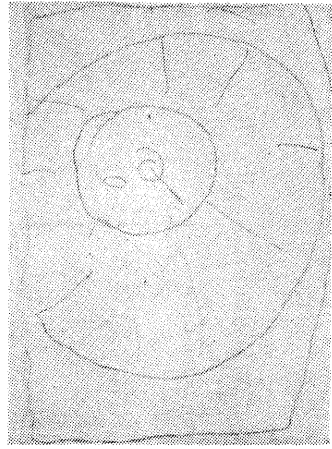
Tは、ずっと以前から、外に出ると、マンホールや止水栓に興味を持ち、母親を困らせていた。丁度、一年半前に、たまたま私がTを公園に連れていったとき、Tは止水栓を開けたりしめたり、マンホールのところにしゃがみこんで、中をのぞいたりしていた。そのときも、私は一緒にマンホールをのぞきこみ、その下の水が流れているのを実感した。それまで母親から話にだけ聞いていたマンホールと止水栓を実際に経験してみると、土の下の底の方に流れる水であることが、一種、無気味さをもって感じられたことが、その時の記録として残っている感想である。また、止水栓の

真中に、指一本の穴があいていて、そこに指をいれてあげようとしてもあかないで、足でふむとガタガタと音がすると、耳をあてて聞く。この後も、同様のことを何度か経験した。母親は、外出を好む、こうしなければ気のすまない子どもを連れて、途方にくれたり、情なく思ったりしている様子であった。その親子の歩いてゆく後姿に、肩を落とした寂しげな表情を見た。Tは活動的であり、母親は大きな声で多弁に話すのだけれども、寂しげな暗い印象は、接するおとなたちに、かなり共通のものであった。その後、いろいろのことがあったが、最近一年くらいは、Tも母親も落着き、明るくなって、以前の暗い印象はなくなって、調子のよいう上向きの生活をしている。

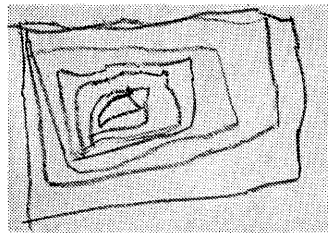
いま、私は、Tのこの日のことを語るのに、このような過去のことを記す必要はなかったのだと思う。けれども、たまたま同じ子どもと、二年間にわたってつき合ってきたので、一貫して見ると、この子どもの内面に、同じモチーフが継続しているのを知る。もちろん、今回の水の流しのできごとの方が、美しい色水を自分で流してその成行きを見るのであるから、より明るく、輪郭も明瞭である。しかし、この子どもの生活の中に、黒く深い闇が横たわっているように思われる。Tは、元気のよい同年の子どもたちが遊んでいるところを避けて歩く。来年は学齢であるけれども、

普通学級にゆくことはいまのところ考えられない。親も子も、社会的な目で見るとすれば、未来は光り輝いたものではないであろう。T自身、こうした自分の周囲や未来について、明瞭な自覚はないであろう。が、自分の前に横たわる暗く深い闇を、自らの内面世界の中に見ているのであろうことを、Tとふれ合ったこのような体験から、私は考えるのである。

内的世界における闇の淵のイメージは、かならずしもTに限ったことではない。Tの色水を流す遊びのことをとり出したとき、直ちに私に思い浮かんだ事例がいくつかある。そのひとつは、自



▲写真1



▲写真2

閉的といわれたKがおとなに要求して描かせた大きな渦巻と、それに相次いで自分で描いたうずまきの描画である。(写真1) Kは、流しに水を流して捌け口から水が渦を巻いて流れてゆくのを熱心に見ていることがしばしばあった。この渦巻は、明らかに水が渦を巻いて流れる捌け口である。捌け口の渦巻型金具と、そこで渦を巻く水は、流しの表面の水と、暗い下方に流れ去る水との境にある。渦巻の動きの中心は、下方に伸びて下にさかかってゆく。渦巻はその境にあつて、下方へひきこむ力を表わしている。

もうひとつの例は、Bの描いた角型の渦巻きである。(写真2) Bは、言語もなく、おとなとの通じ合いも少なく、高い戸棚の上などに上がることが多く、どこから手をつけてよいか分かり難い

子どもであった。その子どもがある日突然、この四角の渦巻きを描いたのを見せてもらったとき、私は何かこの子どもの内的世界を垣間見たように思った。幾重にも内に向かう同心円の中心は、下方の深淵へと吸いこまれるような動きを感じさせる。

外から見ると、知恵がおくれ、発達がおくられているように見えるこの幼児たちは、むしろ純粹に内的イメージに生きる人であるように思われる。彼らは、その遊びの中に、あるいは描画の中に、際立った形でその内的世界を表わしてくれる。しかし、それは、この子どもたちだけの特殊な世界ではない。むしろ、人間がだれでも、その心の奥にもっている世界を、余計なものを取り去って、なまのままの形で示しているものではないであろうか。老人が、再び起き上ることはできないであろう床の上で、夜中に騒いで周囲の人をねかせず、朝日がさして、家の中の人々が起きはじめると安心して眠りはじめることをしばしばきく。人がだれでも迎える老年の最後の時期でありながら、元気なときにはその心境をはかり知ることとはむづかしいことであるが、自らの中に横たわる暗い深淵のようなものを見ているのではなからうかと思う。それは人が、究極的には乗り越えることはできないものであろう。けれ

ども、同時に、楽しむことを自らの内に見出しつつ人は生きていくのだと思う。その光の側を強調するあまり、暗い深淵に目をふさぐと、精神分析が教えるように、暗さはますます拡大して、抗し難い恐怖にまで至るのであろう。

いま、Tは自らの内にある暗さを、いわば、確かめ、克服しようとしている。傍にいろおとなは、その心境に共感し、自らの中にそれを深めようとするとき、子どもはその行為自体に、安らぎと楽しさをも見出すであろう。そして、この子どもの場合のように、そこに見出すものが暗さにつながるものであるほど、その子どもの生活の中に、楽しさを加え、明るさを増したいと思うのである。

流しに水を流して遊ぶTの傍にいて、水の掛け口の奥の暗闇をのぞきこみ、水が流れ去る音を聞いて、私が感じとったことを、後になって考え直して記すと以上のようなことである。三十分も四十分も、水を流して遊ぶとき、ただ遊んでいるというのには、子どもはあまりにも、自らの内に何かを追求し、見きわめようとしているように思える。とするならば、私共も、これを外面的にとらえるのではなく、内面で受けとめ、自らの内に深めてゆくことを努めたいと思う。そうするとき、子どもの内的世界にふれることが可能になる。この面から保育を定義するならば、保育の場

において、子どものすることに意味を見出し、自分の内的世界の中でそれを探究することであると言ってもよいと思う。そのときに、子どもは、自分の理解者を見出し、自分の道を歩むことができるようになるであろう。

保育研究の方法について

科学的な研究方法というときには、証拠を集めて、一般的結論を導き出す方法論がまず考えられる。こういう方法論で追求できる分野があると思うし、それ自体、意義のあるものである。しかし、具体的な保育の場は、保育者にとって一回ごとに新たな場であるので、一般的結論を応用してすむことではない。それでは具体的な保育の実践は、実践的直観と常識あるいは経験によって行なわれるものであるかという点、そんなに簡単なものではない。一回ごとに新たな実践の場における研究と、そのための修練があるのだと思う。その核になるものは、子どもとのふれ合いにおいて、体で感じとられるものである。すなわち、子どもの内的世界は、動きや表情などに微妙に表現されるものであって、おとなはその傍におり、共に動くことによって、体験することのできるものがある。それがとらえられないと、保育の実践も研究も出発しない。

それが体験として蓄積され、自分のものとして深められて、次の保育に環元されるならば、それは保育の実践である。その過程を言語化し、自分自身に納得のゆくものになるならば、それは研究となる。その言語化には、いくつもの段階があるのであって、私共は、そのことの言語表現の修練をもつまなければならぬのであると思う。それがすなわち研究ともいえる。このような研究は、前に述べた、いわゆる科学的研究による一般的結論を得るような研究の概念とは異なるのであるが、保育研究における一つのジャンルである。このような研究において目指されるものは、事実相互の間にある一般化ではなくて、体でとらえられたものの実体に少しでも近づくことであると思う。

今月は、四歳児の保育にはいる前に、保育研究の方法についてあらためて考えてみた。

(つづく)



〔史料紹介〕

渡部平太夫・渡部勝之助

『桑名日記・柏崎日記』(その一)

松川由紀子

これは、昨年の四月号に掲載された拙稿「桑名日記・柏崎日記にみられる近世庶民の家庭教育について」の史料篇である。

桑名日記より

一八三九年六月十日(鎌之助三歳)

鎌むくりと起ると、金毘羅様へ太こ叩きにゆこふ、お爺さんとゆこふ、ちやらちやはいて行ふといふ故、裏口より連れて行。お婆と行つたり、おみちさと行つたり余念なく遊ぶ。

同年六月十七日

御婆と鎌こおよし、お隣のおこうさ鳥

居の祭にゆき、四ツ過かへる。鎌こ太鼓のばちを持って行かねばならぬといふ。いろくだましてもきかず、よぎなく持せてゆきしに、川口鳥居に太こしばりつけてありしを、少したゝきたんのういたし候よし。もどりにねむりてかへる。

同年六月二十日

鎌児とかく御ぜんを食べず、らくがんで々ねたり、五十文のらくがん今日食べる。御蔵よりかへりがけに、京町かみくずやの本救命丸をとゝのへ飲せる。

同年六月二十一日

鎌こ朝も昼も御ぜんよくたべる。しかし次第にわんぱくになり、お婆の乳をしつこく吸ふには困る。大分足もたつしやになり、雪駄も下駄もひとりではいて歩く。

同年七月一日

鎌こひる寝ながら宵の内大分起ている。今夜は留五郎、重次郎、三こ三人が鎌児をつれて、町屋川へ涼みにゆき、今村はとあみを持ってゆき、あゆ取て見せたり何かする内、つい眠りしゆへ、三こふところへ入れ、五ツ時分つれて帰る。

同年七月十五日

鎌こ西瓜をすきになり、朝めがさめると、寝どこですいくわくんなへ、すいくわくんなへとねだり、あまりたべさせては、もしどくになるまへかと、さいわい今夜医者がきたゆへ聞きたれば、水ものにてどくにはならずといふゆへ安堵、まぐわうりはよろしからずといふ。

同年七月十七日

鎌こはちとねつがありしを、あせものせいじやと思ひ、まへばん湯へいれしに、からだへも四つ五つ真赤なものができ、これはすいとうじやそふじやと湯へも入らず、救命丸をのませたり、一角丸をのませたゆへ、元氣はよけれど腹やせなかへできてゐるゆへ、かげんしらぬものはだかれず、留五郎と三こがつれてゆこふといへども、ことわりてやらす、夕かた矢田町へねりがすこしきたのを、おせんがゆき見せる。

同年七月二十七日

今日は庚申ゆへ、豆いりをして鎌こをかわいがつてくださる若衆へ、お茶をあげる。

同年八月四日

鎌こ日にまし足はたつしやになり、大口はきく。おせんのところ毎日たび／＼ゆき、夕方洗湯がへりに佐藤へゆき、若衆がきてゐると、じきに相撲をとる。ひるももう内へゆこふと云て、門のそとへ出たじぶん若衆がよいちや／＼とすまふをとるまねをすると、うろたへてもどりとび上り、留五郎をまかすようにしてみせると、目をまるくして外の人にとつてかゝり、留五郎をば鎌こ大ひいきのよし。

同年八月二十一日

昼より町屋川へ鎌あそばせにつれてゆき、……ふねのある所へ鎌こつれゆき候ところ、出たりはいつたり、とものところよりとびおりたり、小石をひろひ、とものところへもつてあがり、その石をなげたり、まことによねもなく一ときほどあそばせ……

同年八月二十二日

日に増しべろはまわる。わやくもする。あまりわるさをするときは、越後へやつてしまふといふと、もう止める／＼

といふゆへ、そんならおとなしくしやれといふ内、またにこにこわらひながらわるさをする。しかし又ばべるばべやうといふのは、いまだなおらず、そのほかは大分口がきけ、かわいらしく相成候。

同年九月五日

今日も雨ふり。鎌こ起ると栗むいてくんなへといふて、くど端へ来る。柿はそのように喜ばず、栗は誠に大好なり。下いんじよのかめへ、ひとりでしつこをし、じよぼじよぼ音のするを面白がり、よくひとりでかめの中へする。けふも道がわるいに、かめへしつこをしにゆくと、下駄ばきにて出て膝をつき、着物をよごしたさかい、洗濯綿入のたもとのあるのを着せたところが、誠にうれしがり手まりを入るやら、網を入るやら、御せんをたべるにも膝がよごれるとて手拭をかけ、右のたもとを見左のたもとを見、にこ／＼笑ひながら御せんを食べる。三ぜんづゝはかゝしなくたべる。この間新地の鉄坊がきて箸でたべる故、おれもはして食べやうといふてさじを止め箸にて

食べ、それから毎日箸でばかり食べる。まへにち佐藤へゆき、騒ぎつけるを、若衆が可愛がりおさつを買ふてもろふたり、粟をかふてもろうたりする。人おくめせぬ故、誰にもかわゆがられる幸な小坊主なり。あまり自慢するやうなれど、ほんに／＼愛嬌者。

同年九月七日

かなりな天気、鎌こ目をさましたところ、まだお婆がねていたゆへ、大そうにうれしがり、ぼぐねていなつたねへといつて、さま／＼なはなしをして、おきるとすぐにお爺さま栗むいてくんなへとねだる。むいてやる。それより齒を塩にてみがけば、おれにもくんなへといふ。すこし手の平へのせてやる。いつしよになつて井戸端へゆき水をくんでやると、口をそぐぐやら、顔をあらふやらお爺のまねをする。夕べも佐藤へ網すきにゆこふ、つれていつてくんなへとねだる。五寸四方ほどの網を夜屋はなさず、寝るときはね床へ入、あさ起る時には持て起この網で町屋川へいつて、とと取てきて

お婆にあげるぜとおりふし云、殺生好なるもしれんて。

同年九月八日

天気あたゝか、あき御ぜんたべてから、鎌こ新屋敷へつれゆく。みな様大よろこび、じきうらへ柿をもいでもらひにつれてゆく。おぼさま鎌子のかほをながめて、あのまア可愛らしい顔をおかゝに見せたらどふたるふとおつしやる。それから大きな柿一つむいてもろふてたべ、おぢやのも半分へる。その内におぢさまおじいさまおかへり、おや鎌こがきているか、よくだぞと大よろこびなされる。すこしもだかれず、あるき通しましたと云ば、それはかんしんだ／＼とくりかへしおほめなされる。じんざも来ていて、鎌こ大きくなりなしたとよろこんでおる。おれはかへるぜやと云ば、あいに晩におぼゞにおくつてもらうんだといふ。おぼゞさま、お／＼／＼おくつてやるとも／＼とよろこんでいなさる。

同年九月十五日

鎌こ昨日はたんがおこつて、御ぜんも

いつもほどたべず、苦しそふであつたゆへ、しがみあめ買ふてたべさせたのがよかつたかして、夜食はしこたまたべ、元気がよくてあくれつてどふもならん。

同年九月二十日

鎌こ四五日先から、くいうちを習ひ、毎日お隣へくいを持て遊びにゆく。熊坊らも朝つばらから迎へにくる。どこからもろふてきたか、くいが五六本ある。

同年十月十三日

いやもふ鎌この日ましにわるさをし、いふことをきかぬには、おぼゞもころつとする。くれあいにもおぼゞが流しもとをしもふているのに、ちちをのもふといふてぶらさがり、ちとまでといふてもきかず、おぼゞが云には、このやうにおれをいづるところを、ととやかかに一目見せたいわと云てくどく。それからせんとふへいつたところが、手ぬぐひをおすれてきたから、とつてこへといふて大だとおこし、しかたがなへからおこんにいそひでとりにやる。それからよふやくきげんをなおしてかへる。

同年十一月二十二日

今日横村より甘酒を鎌こへもろふ。夕方お婆と銭湯へゆかんかといへば、くしやみが出るからゆかんといふ。お婆いつときなへ、おれはお爺さとおるすいしてゐるといふて、こたつで本を見ている。お婆が帰つてから眠り四ツ時分眼をさまし、甘酒飲みたへといふから暖めてやる。こんこんさんの皮くんなへといふから、持つてきてやる。その上に坐り甘酒を飲む。今日も日記を書くそばで鎌こ言ふ。おれもおかかのところへじし書いてあげやうねへ。引出へしまつておきなつたろふといふ。何やら紙へ墨つけてゐる。

同年十一月二十四日

鎌こそのお触れをしつかりにぎつて、どのやうにだましても叱つてもはなさず、しわだらけにするゆへ、むりにとりあげたところが、大だだおこし、お婆とおなかとかかつて、腹へきうすゑにかかつたけれど、なか／＼力があつて、よふよふ一つすゑにおきにしたげな。それで

もきかんで、お触れをよこせとただをこねたげな。いやもうこのあいだは、氣にいらぬ事じやと、お婆と馬鹿やろおぢいさばかやろ、だれのことも馬鹿やろ、お婆などはぼうを持ってくらしつける。すみからすみまでわるさをするには、お婆どもこまりはてる。

同年十二月八日（鎌之助四歳）

鎌之助誕生日につき赤のままを炊く。どじやう汁にて留五郎をよぶ。

同年十二月九日

鎌ことおなかに牛を煮て風呂から帰つてから食べさせる。牛のとど甘くてならんと言ふて二人が食べる。鎌こ大丈夫の上牛を食べさせたら、余り騒ぎつけて手にあまるであるふと言ふたら、お婆が言ふには、牛を食べたら牛のやうに、のろくなるやもしれぬと言ふに大笑。

同年十二月十七日

鎌こおなかに負はれて獅子を見に行く。……鎌兎にこたつて昔を語つて聞か

せる。又カンゼヨリをしたり紋を切つてやるやら、やうやう色々なことをして遊ばせる。

一八四〇年一月二十六日

鎌こ大分べるがたつしやになり、ばべるもたべると言ふようになり、指四本出してこれいくつといふ故、四つといへば又五本出していくつといふ。五つと言へば引つこませて、げらげら笑ひながら、べろりと言ふて江戸豆をこしらへてちよいと出すを、あゝきたな、きたなといふしまひには豆を出す。誰がして見せたと言へば、早川のお婆さ、してみせなつたといふて今日は元氣よし。

同年二月十一日

浅野のお爺さに武者だこを貰ふ。あげよふ、あげよふと言ふから、今日は風が強くてあげられぬといふても、なかなかがてんせず。

同年五月十一日

子供といふものは、おかしなものにて、よその子供が、ごんぞうぞうりを、は

いているを見て、はきたくなり、せつたも皮ぞうりもいくらかもあるに、たつた今ごんぞうりを買うてくれといふて、お婆にねだりしゆへ、貰ふてやつたれば、大そううれしがり、毎日そのごん蔵が多うといふて、はいて歩きあそぶ。

同年五月十二日

鎌ゆすらをもぎに出る。寒竹の先を輪にして、飯つぶをくれといふからやる。切れをくれといふ。何にするといふたれば、とをとるのだといふ。それでは水の中へ入ると、しつきではなれてしまうからだめた。そんならお爺さこしろふてくんなへといふから、お婆にもじの切五寸に七寸ほどもろふて、ぬいつけてやる。おなかと二人が、めんばちめだかをすくふてきて、うれしがる。昨日夕方のことなり。

同年六月十三日

鎌、さあお爺さ相撲とろふという。負けてやつてほめると、大そふうれしがり飛び上る。ちんぼが出るから、これでふんどししめてくれといふ。お婆しめてや

ると、善蔵おかしくて、こたへられぬとて大笑する。

同年六月二十日

鎌こ寝ている。静かゆへ日記を読む。ろくの枕を抱へて守りする真似、おなごの子は、こしやくなものやお婆笑ふ。のこらず読みてしまふと鎌目をさます。ろくの手のひらを見ては、鎌こよりは太そう太つておるとみえて幅があり、ぜんたい男の子の手のひらに見へ、大どた娘とならねばよいがとお婆と笑ふ。

同年七月十九日

鎌こ相撲を取るにも力足ふむことは止めにして、いさかひにかかろふとゆふて、二間も先からとんできてしがみつき、足がらみをかけて、まかしてやれといふ。足をからみつけて、かつと両手をあげて、うわうといふなり。石取の太鼓もよほど上手にたたくなり。

同年十二月八日（鎌之助五歳）

星は子供客隣の子供二人、横村の勝、

大寺のはる、長谷川のゑつ、金山の鉄、新地しげ等なり。片山のお婆様八ツ時分お出でなさる。扇子とおなかのところへかんざしおくれなさる。おこんより黒塗の足駄浅黄縮の下駄、新屋敷より紅葉のからかさ黒豆おくれなさる。新地姉様鉄坊をつれてきなさる。鎌之助のところへあしだをおくれなさる。その他は扇子はな紙半紙をもろふ。おせんのところよりみご表に白絹の緒、ぐみの裏付草履、鎌大層よろこびそれをはいて歩く。晩の客は均平、又四郎、為八郎、新屋敷おちいさおばあさ、浅野のおちいさ、金吾、大寺、八三郎、春吉、新地姉様、片山おばあさ、郡のおますさ、おきんさ、おこん、佐藤で二人、おますさの娘もよぶ。にぎやかにて鎌うれしがり鉄坊と大騒ぎ四ツ過まで起きている。均平為八郎五郎皆よひ倒れる。八幡へ参りおこわ一重と百文供へる。さこん装束して神酒を供へ、子供に太鼓をたゝかせ、鎌の草履を装束にて払うて御守を御みきと、内からやつたおこわを供へたのをよこす。鎌の

上下を着て草履をはくところを、二人のお婆がいふには、親のない子ではなけれど、遠國へだて一目見せることならず、それともしらず、あのげんきよく参りにゆくことはと、後姿を見て涙ぐむ。

同年十二月十八日

鎌こちやかまやせぬを唄う。お江戸日本橋より高輪夜あけでてうちんをまで唄う。のぼる箱根も出来る。そのほか大分べろがまわるやうになり、五音相通もちとづつ出来、横よみ、あかさたなはまやらわなどひとり出来る。

一八四一年一月三日

鎌こ内が賑やかにてうれしがり、中どの上にて前をまくり、佐藤のおぢさ、郡のおばさ、おこんさ、山岡のせんさも来て見なへ見なへといふ故、代る代るゆけば、そばへきなんな、おかめの下で見なへといふ故、おかめ面を掛けておく柱にもたれて見て、これはえゝちんぼえらいもんぢや、でらぶつじやとほめると、大そううれしがつたとて、みなみな腹筋をよつて笑ふたげな。

同年一月六日

水瓶にうす氷はる。軒にさがん棒の出来たを鎌見つけ取つてくれとせがむ。羽子をつくから羽子をこしるふてくれとねだる。おみきをつげばおれがつぐ。火をうちかくればおれが打つといふ。丈夫にあくれるがせわはやけれど、わずらふているよりはるかましじや。

同年一月十三日

鎌之助豆まきにて大喜び。方々へ拾ひに歩き、内の豆ひろひ、佐藤でも鎌が行とまく。

同年一月十四日

鎌之助、留五郎をねたり西河原のどうど焼見にゆく。
(つづく)



幼児の教育 第七十六巻第九号

九月号 ◎ 定価二〇〇円

昭和五十二年八月二十五日 印刷

昭和五十二年九月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

運動会を楽しく盛り上げる

フレーベル館の運動会用品



●ご注文の際は、お早目にお申しつけ下さい。

今年も新商品を加え、一層充実しました。

○大玉 (赤白 1組)	16,000円		○平均台 (特製大)	26,000円	
○大玉 (赤、黄、青、白 1組)	32,000円		○平均台 (特製小)	21,000円	
○大玉空気入 (足踏式)	4,000円		○平均台 (普及型)	13,000円	
○バスケット台 (紅白2台1組) ネットつき	19,000円		○紅白帽子 (1個)	220円	
○バスケット玉 (100個 1組・紅白各50)	8,500円		○色帽子10色 (1個)	300円	
○ネット (紅白 1組・バスケット用)	2,000円		○等賞旗 (1~5等 1組)	2,000円	
○すずわりセット (紅白 2台 1組)	30,000円		○万国旗 (20枚 1組)	4,500円	
○綱引ロープ (30m)	19,000円		○紅白旗 (紅白 2枚 1組)	400円	
○キンダーファニートンネル	14,000円		○旗立台	950円	
○キンダーファニートンネル T字型ジョイント	14,000円		○巻尺 (30m)	3,100円	
○キンダーファニートンネル Y字型ジョイント	15,000円	○キンダー 6色円塔 (6本 1組)	11,000円	○アーチ (入退場門)	40,000円
○キンダー 6色バトン (6本 1組)	1,100円	○キンダーカラーフープ (6色 1組) (特大)	3,800円	○テント 4.78㎡ ~25.06㎡	51,200円 ~136,500円
	○キンダーカラーフープ (6色 1組) (大)	3,000円			
	○キンダーカラーフープ (6色 1組) (中)	2,400円			
	○キンダーカラーボール(大)	400円			
	○キンダーカラーボール(中)	280円			
	○キンダーカラーボール(小)	90円			
	○キンダードッジボール (6色 1組)	6,200円			
	○キンダーサッカーボール (3色 1組)	4,100円			
	○ポンプ (ドッジボール サッカーボール用)	1,450円			
	○ライン引	4,900円			
	○キンダーハイジャンプ (2台 1組)	9,800円			

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課 TEL 東京(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

創業70年・キンダーブック創刊50年 フレーベル館